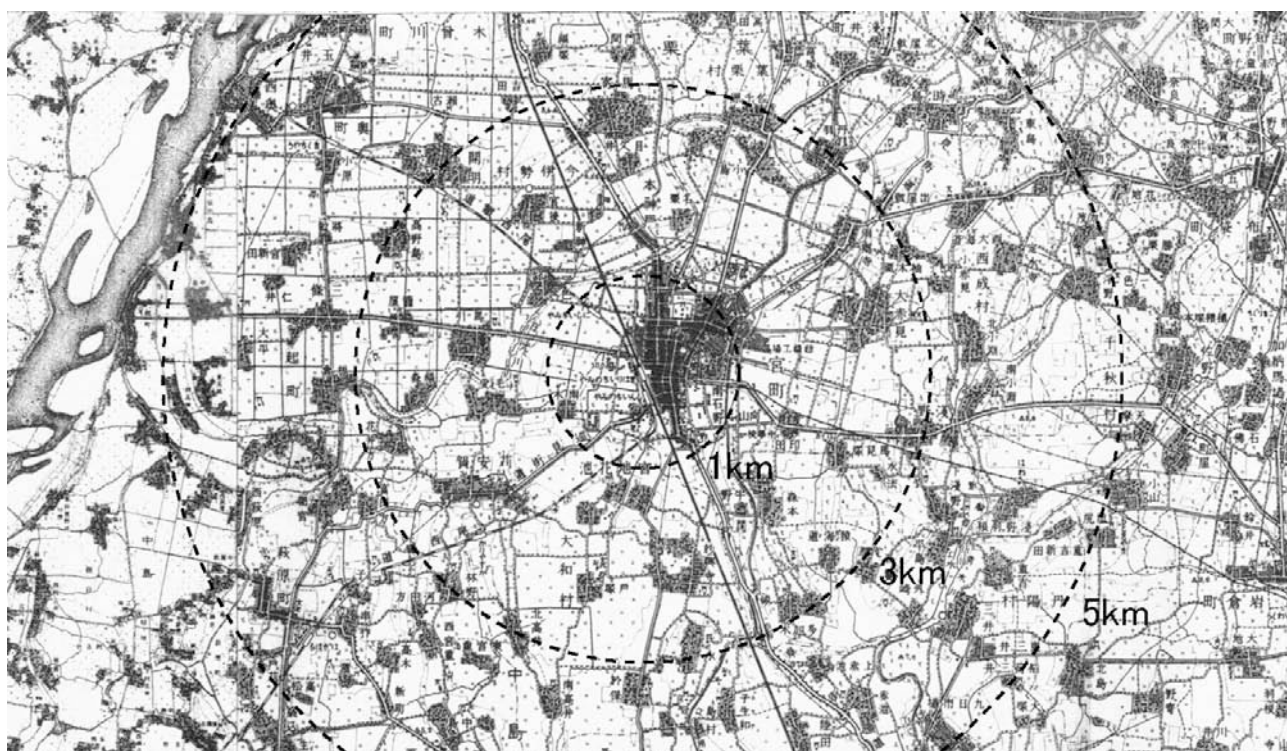


# 伊藤喜栄塾 地歴史学講座

2013年度 後期

- 第4回 ( p1 )
  - ・ 2013.10.5
  - ・ 前期総括
- 第5回 ( p5 )
  - ・ 2013.12.14
  - ・ 「コミュニティ」について
- 第6回 ( p15 )
  - ・ 2014.2.15
  - ・ 「郊外」について
- 第7回
  - ・ 2014.3.8
  - ・ 後期総括
- シンポジウム ( p23 )
  - ・ 2013.11.2
  - ・ 一宮で、産業とコミュニティの連携による地域再生を考える



▲尾張西部地域におけるコミュニティ原単位としての集落地の分布(1920年頃)▲

1. 伊藤塾長雑感

2. 質疑応答

1. 伊藤塾長雑感

- ・名古屋大学の工学部に入学して、建築とか都市をやろうと思ったが当時はなかった。それで地理学教室で都市問題ができると聞いて見学にいった。文学部地理学教室はできて2、3年でまだ学生がいないということで、スカウトされた。同学年は3人だった。
- ・地理学には丹羽先生という優れた方がいて、学生が少ないので大事にされた。奨学金を取ってもらって、大学院まで学ばせてもらった。当時、初任給が8千円の時代に1万円いただいた。学資が足りないだろうということで、家庭教師の世話をしていただいた。それが、ここにおられる重松毛織さんのところ。五人兄弟で、十年お世話になった。
- ・2000年に退職した時ならば、「いい日本だった」と思って終わったが、今は、「死んでも死にきれない」という気持ちが強い。年配の方々の多くがそう思われるのではないかな。
- ・前に、一宮に魅力がないと言われた方がいる。住みやすさということで、私の体験から言えば、それは、郊外（サブアーブ）とコミュニティという問題だと思う。後期では、コミュニティの歴史と絡めながら、コミュニティの再生問題を郊外と結びつけ、期待を込めて提案したい。
- ・戦略と戦術のお話をした。英語では **strategy** と **tactics**。最初に、参謀本部が使ったらしい。戦いという文字が入っているが、戦略は青写真、グランドデザインのような意味で、日々直面している問題への対応が戦術となる。参謀本部が考えるのが戦略で、師団の参謀あたりが考えるのが戦術といえればいいかもしれない。市民はいつも戦略、戦術を考えていなければいけないのかと言えば、そんなことはない。そういうものが提案された時に判断するために、関心を持って身につけておいていただけるとよい。じゃあ、誰が戦略、戦術を考えるのか。地方自治体では、市の企画担当である。長期的展望と身近な問題をクロスさせながら、立案して、市長さんに提案して議会に諮る。市会議員の方にも、戦略と戦術の複眼で考えるという観点で議会運営をしていただきたい。市民の方は、そこから出て来る戦略を普段の生活を絡めながら判断する。その時、判断を失敗する要因が、「いま、ここ、自分」という日々の日常性にとられることである。
- ・それに関連して、ポーランドのユダヤ人のはなし。ナチスに対して、戦後の西ドイツ側にいたユダヤ人は早々に逃げている。アンネの一家はフランクフルトからオランダに逃げたが中途半端だった。オランダがドイツに占領されることまで読めなかった。杉原千敏が逃がしたユダヤ人は、ポーランドの貧しい人が多かった。このままではいけないと思った人が杉原さんのところに駆け込んでパスポートをもらって逃げた。オランダ領キュラソーのパスポート。シベ

リアから日本を通らなければ行けない。ヴィザを出すのは日本。その時、「いま、ここ、自分」しか考えなかったユダヤ人は、ポーランドに何百万人と残った。商売やっけて、財産もあって生活が安定している。そういう人たちが一網打尽で囚われてアウシュヴィッツに送られている。弱小民族であれば、常に先を読むことが必要となる。

- じゃあ、日本はどうか。安倍さんは、いさまして「強いニッポン」と言っているが、私はそうは思えない。日本はずっと、アメリカの属国のままで 60 年以上が過ぎた。変に強がりを見せると、韓国や中国が黙っていないという状況。私は小国論者。世界に迷惑かけないからほっといてくれという立場。しかし、小国論の支持者は少ないようだ。右からも左からも支持されない。とにかく、日常性に埋没して、「今がいいから、いいよ」では危ない。先をみながら、今を判断していただきたい。
- 私が地歴史学と言うのは、経験的に、ビスマルクの言う「賢者は歴史に学ぶ」だけでは足りない、地理が必要と考えるからである。東京の人は、東京の経験がいずれ地方でも再現されると思込んでいる。これが歴史に学ぶことの限界である。それぞれの土地の事情があって、東京のことがそのまま再現されることはない。
- 公共交通が発達して、駅から 10 分、15 分で帰宅できる場所に家があるところでは、駅前に飲み屋、商業施設が発達する。ロンドンはややそれに近い。郊外電車を降りると、パブ（パブリックバー、パブリックハウス）がある。ポストンにはパブはない。ハーバードのあるケンブリッジには、学生のための店は多いが、駅前に飲み屋がある訳ではない。駅前に飲み屋ができるのは、東京の文化。名古屋は違う。駅を降りてからもう一回、車に乗らなければいけない。だから当然、ローカルカラーというものがある。ローカルカラーを見るためには、歴史に学ぶだけでは足りない。
- 東京を見て、「わかった」と言う人がいる。しかし、「わかる」ということはどういうことか。まず、目で見て「視察」、  
「観察」、次が「考察」で、頭で考えながら理解する。もうひとつ、「洞察」がある。それぞれ、認識のレベルが違う。英語では、looking、watch、consideration、insight。全部含めて「わかった」ということになる。わかり方の程度が重要になる。インテリジェントということばがある。日本語の情報には、インフォメーションとインテリジェンスの両方ある。インテリの語源。インテリジェンスには、スパイの意味がある。洞察に近いもの。調べたことを、ある目的にしたがって組み直すという意味合いがある。だから、「わかる」にもいろいろなレベルがある。
- 研究者をやっけて良かったと思うのは、こういう機会を作っただけのこと。大学の先生を長くやっけても、

そんなにあることではない。もうひとつ、教師をやっけて良かったと思うことがある。私が慶応大学に移ったときの最初の学生さんが NHK に入られたが、名古屋に転勤されて、今日、来られている。三十年振りにお会いした。長生きしてよかった。ただ、一方で長生きしたおかげで、滅び行く日本を見なければいけない。

- 今回の講座については、実は、難しいというご意見もいただいている。わかりやすさを心掛けているが、レベル的には落とさないようにしている。

## 2. 質疑応答

### 質疑1

刈谷に行く機会があったが、比較して一宮の駅前に人が少ないことを実感した。産業が弱いということかもしれないが、どうしてこうなってしまったのか。（聴講者）

### 質疑2

一宮の羊毛が廃って、もう 25 年ほど経っている。ソニーも撤退している状況で、ベーシック産業を考える場合、一宮の有利性として、名古屋に近い割に地価が安いという印象を持っているが、土地が提供されていない気がする。企業誘致やっけているところは、ちゃんと土地利用計画を持っている。県あるいは市が土地を持っているのが大条件である。買物かごがない状態で、来てくれというのはありえない。大きな疑問である。もうひとつ、人材、知識の問題。イノベーションを起こすような人たちの集団、大学がない。致命傷となっている土地利用の構想をつくらないと次のベーシック産業も考えられない。コミュニティ産業では弱い。一宮の有利性はどこにあるのか、致命傷への対応をどう考えればよいのか、お聞きしたい。（聴講者）

### 塾長回答

#### ●産業戦略としてのベーシックインダストリー

- 私は、西三河も近い将来、危ないと思っている。濃尾平野は、20 年前に工業地帯としての活力をうしなした。西三河のように、下請けを含めて、自動車関連のシステムができあがっているところは世界でも他にない。だから、低賃金で自動車を作る仕組みが残れば、西三河には外資系がどんどん来てもおかしくない。しかし低賃金労働は海外に出ている。それを入れている第三世界は、昔は教育程度が低かったが、今は識字率など能力がレベルアップしていないため。だから、日本人でなければできないということはない。西三河が残るとすれば、東南アジアから低賃金で連れて来て、日本人は失業、ということではれば維持できる。
- ダメになりかかった先行例がイギリスだが、サッチャーが

救済したと言われている。どういうことをしたか。イギリス人を雇用するならば、どこの国の会社、工場でも構わないから誘致して補助金を出すとすることをやった。昔、日英地理学会議が開かれた。ロンドン大学で日本研究やっているグループが、テムズ川河口のチャタムというところに連れてってくれた。チャタムは、古い軍港だったが、浅くて使えないので軍港やめて、軍施設もなくなった。徳川家康に使えたイギリス人で三浦按針（ウィリアム・アダムス）の出身地でもある。企業誘致の盛んな頃で、市役所と商工会議所が合同で大昼食会を開催してくれて、専門違いだと言うわれわれに対しても企業誘致を仕掛けてきた。それぐらい一生懸命やって、日本からもアメリカからも多くの企業が進出した。

- ・日本は日産が最初に行った。トヨタは採算意識があるからすぐには行かない。日産に与えられたところは、北部のニューカッスル。マーケットから遠い。トヨタはどうしたか。私がシェフィールド大学にいる頃に、トヨタは進出の下調べに来ていた。日本で持っている工場と同じように高速道路がクロスして、しかも小型だが空港もあるところで、バーナストーンというところに工場をつくった。作っているのは、アベンシス、日本で言うコロナ。
- ・産業の戦略を考える時に役立つと思うのが、ベーシックとノンベーシック。ベーシックは、外から所得を持つてくるという意味合い。産業でも機能でもよい。ノンベーシックは、ベーシックが強くなって発生する購買力をあてにして発達する産業。アウトレットは違うが、普通の小売商業はノンベーシック。飲食店も同様。問題は、自立化する上で、ベーシックをどうするか。福島県の失敗は、これが原発だったこと。一宮はどうか。かつては、地場産業の毛織物があったが、いまはダメだ。罷めた毛織物業者に聞いてみたいが、地場産業を中小企業でやっていてダメになったところはむしろ少ない。例えば、タオルの今治、ジーンズでは倉敷など頑張ってる。どうして、一宮にそのねばりがなかったのか。

### ●一宮のベーシックインダストリーの可能性

- ・大学院の頃、ニックから頼まれて、アルバイトの学生を使って、毛織物工場6,000の工場のアンケート調査をやった。当時の調査データが残っている。論文に使ったが、箱に入ってる。図書館はひきとってくれないだろうが、何とか保存できないかと思う。
- ・ただ、もう一回、毛織物で復活するのは難しいのではないかとすれば、何でいくか。前期冊子（p27 図17）に、研究開発施設の立地図がある。この地域には、研究開発の施設の立地が少ない。実は、インターチェンジの周辺はそう

いう条件を持っている。ラブホテルではなく、研究開発、試作工場などを誘致する土地利用を計画して、公共投資して環境整備をするようなことをしていない。インターチェンジが4つあるらしいが、その周辺が有効に利用されていない。地権者もいて、諸々の問題があるだろうが、行政が調整して、一宮の将来のために手当てをしておくことができていなかった。他の地域では、インターチェンジの回り、半径1から2kmの範囲にどういうものが立地しているか。一宮とは違った土地利用をしているところが多いだろう。そういう戦略を持ってなかった。あるいは、ラスベガスのような歓楽街もひとつの方策かもしれないが、それを市民が受入れられるか。住宅としてもどうだろうか。

- ・ソニーは、全国で繊維産業のある地域に入ってきて、少し高い賃金で労働者を持っていった。しかし、そのソニーもダメになった。今度、コナミが進出した。コナミはこういう戦略であの場所を選んで、将来どうするつもりだろうか。遊戯機械とか、体操の内村で有名だが、ものづくりから外れているように見えるが、実はゲーム機の中身はハイテクである。行政がバックアップして、コナミは一宮だと全世界に言えば、一宮のポジションは上がる。だから、あれを拠点にして跡地を活用していくことが考えられる。体操の関連で売っていくことも考えられる。例えば、体操のトレーニングセンターはどうか。
- ・それから、昼だけでなく夜も含めて24時間型で施設を考えるべきである。合宿ができるようにする。そのためには宿泊施設だけでなく、その回りにいい環境をつくってやる。いい環境とは、先進国の一般標準では「緑」である。一宮は緑が少ない。平地林がなくなった。ヨーロッパの経験では、なくなった緑に対して、市や県が公共投資で復活させている。ドイツのボン大学にいた時、街の中の大学から歩いて50分ぐらいのところには日本の大使館などもあるイッペンドルフという村がありいいところだった。そこに外人教師用の宿舎があって、そこから毎日、往復して通った。森があって、小川（バッハ）が流れている。いい環境だと言ったら、あの森の木の幹の太さと高さを見たかと聞かれた。要するに、戦争末期に薪がなくなり、全部伐採されて植え直されたものらしい。ケルン大僧正の事務所と住まいがボンにあり、彼のハンティングの森でもあった。それが一度伐採されたが、戦後、状況が良くなって、また木を植えて森にした。特別に何かがある訳でもないが、そういう森が復活している。
- ・一宮の大きな工場の跡地は、スーパーになるぐらいで、工場にもなっていない。ルール工業地帯やシェフィールドでは、工場が潰れると、市が全部、借り上げるか、買い上げて、林にする。だから、非常に森が多い。シェフィールドなん

かは市街地の6割が緑である。考えようによっては、若い女性が夜間に一人で出歩くのは危険だが、そのような行為は非常識だと考えている。一宮では、工場の跡地が緑になったところはない。今度、競輪場の跡地をどう使うのか、どういう戦略を市は立てておられるか。住民サイドまで、情報が来ないのでわからない。ここで間違えるとベーシックなものを補強するのはできなくなる。

- では何がいいか。名城大学や南山大学など名古屋の大学が一時期、外に出で、大学が核になりそうな時があった。しかし、学生数も少なくなり、もう期待できない。日本の大学は「片肺飛行」で昼のことしか考えていない。アメリカなどの大学は、だいたい寮を持っていて、24時間フル体制になっている。それが雇用を生む。寮の賄い、掃除など。ヨーロッパでは、ひとつの大学を誘致したら、人口3万人ぐらいの都市ができるという感覚である。日本は世界の常識から外れている。

### ●一宮の有利性

- 名古屋に近いか、遠いかの判断が難しい。東京の50km圏に相当するだろう。そうだとすると、名古屋大都市圏の端っこにあると認識した方がよい。端っこにあるということは、郊外として自覚して、郊外として政策を立てていく戦略を持つかどうか。ひとつは、ものづくりの拠点としての郊外であり、これは工業団地。もうひとつは、中以上の所得水準の勤労者の住宅地。どちらかあるいはその複合でもよい。そのためには、土地が重要であるが、住まいの方では、木曽川の水辺を上手く利用できれば、健全なレジャーに活用できる。先行例が、一宮タワーのところだろう。河川沿いに緑をベルト状に整備していくとよい。また、ボート、ヨットなどのスポーツとしての利用価値も高い。ハーバード大学のチャールズ川には、ボートが並んでいる。テムズ川の水、幅に比べたら、木曽川の起から下流にかけては良い。笠松から下流の姿かたちは、ライン川のルール工業地帯の下流とよく似ている。あれを使わない手はない。その切掛けは、大学がいいかもしれない。

### ●資本主義をめぐって

- アダムスミスに始まってフリードマンまで、いまの経済学の主たるカレントは、ものづくりの経済学であり、国民経済という入れ物の中でやっているが、もう一国では収まらない。では、ものづくりではない経済学とは何か。実態経済と金融経済と分けて議論するようになった。実態経済は、あくまでもものづくりが基礎で、ものを安く、沢山つくって、国内外で売って儲けること。アダムスミスもマルクスもマックスウェーバーも、ものづくりで、職人の資本主義

の延長のようなもの。職人の部分が産業革命で超機械化して、高能率になって、ものが溢れて、資源搾取の状態もスピードが早まった。

- 金融資本主義は、ものづくり資本主義にお金が足りないから、遊んでいるお金を集めて貸すというところから始まっている。それを遡っていけば商人である。商人はものづくりをしない。ものを動かす、金を動かすだけである。国の富は商業からきていると考える。その延長上に構成されるような経済学がもう一度、台頭してくるかもしれない。それが、現在のグローバリゼーションの中での金の動き。金融商品というのは実態がない。金融資本主義が一人歩きして、先祖帰りで、重商主義の時代の経済になりつつある。
- もっと遡ると、重商主義に対抗する経済の流れが重農主義。国風は農業で、土地からの上がりが基礎。エコロジーの考え方からすると、案外そうかもしれない。「産業革命がまざった」と考えるのはそこから来ている。アダムスミスは、産業革命で蒸気が発明されて機械が動き出す前に死んでいる。だから、アダムスミスは正しい。資源を破壊していくスピードものろいし、供給されるものも職人がやることだからたかがしれている。ところが、蒸気機関が発明されて機械でやることになってから状況が変わってきた。
- いま、経済学では使用価値は一切語られない。価値とは何か。限界効用つまり需給関係で決まる。最後に欲しい人がつけた値段が価値だと。つまり交換価値である。アダムスミスは、使用価値を強調している。マルクスもそうだ。使用価値を持った者こそが、交換価値があるという考え方。そうすると、金融商品はどのような価値があるのか。ものは、使用価値を持っているがゆえに、ものの持っている値打ちがある。ところが、経済学は、使用価値と交換価値の関係はややこしいから捨てている。いまの経済学は使用価値を言わない。しかし、社会にものが動いているということは、使用価値を前提としている。例えば、空気は使用価値が高い。今は空気も売るかもしれないが、交換価値が小さかった。かつては、水がそうだった。交換価値と使用価値の問題を人類は説明できていない。
- 技術系は、社会における使用価値を高めることに興味を持っている、あるいは生きがいを感じていると思う。しかし、いいものを作ったのに、みんなが受入れないということを感じなければいけない。実現のプロセスで採算性が重要だと気づく。投資効率ということばがよくない。費用対効果とよく言われる。しかし、もともとコストベネフィットは、費用対利益であり効果ではない。同じ便利さならば、なるべく金をかけない方がよいということである。

## 第5回

### コミュニティについて

#### 0. はじめに

##### 1. コミュニティとは何か

- コミュニティと Community
- Community としてのコミュニティを考える

##### 2. コミュニティの伝統的な意味

- 歴史学、社会学、地理学

##### 3. 地歴学からのコミュニティ試論

- 原型:農村型と都市型
- 遷移型
- ファクトリーコミュニティ、ビジネスコミュニティ
- サブ・コミュニティとしての近隣区(Neighbourhood)、近所

#### 4. 結語

#### 0. はじめに

文藝春秋の元編集長で作家の半藤一利氏が書いた『幕末史』は、慶応大学の市民講座で12回のお話をまとめたもので、聴衆はコンスタントに25人程度だったそうだ。その前に書いた『昭和史』は、平凡社のバックアップによるものだが聴衆はわずか4人だったらしい。それに比べれば、この講座の方がはるかに多く、皆様のご協力に大変感謝している。この講座では、本に書いていないことを話している。

残り2回の講座では、生活空間という観点から、コミュニティと郊外について話をしたい。今日はコミュニティについて。

##### 1. コミュニティとは何か

###### ●コミュニティと Community

- ・ コミュニティについて、日本の都市計画は、最近はあまり議論されていなかったと聞いた。地理学もそれほどしっかりとやっていない。真面目にやっていたのは社会学だろう。私は、前にも言ったように「地域」へのこだわりが強い。いい加減な使い方をする人には問い糾すようにしている。有名な経済学者と話をしている、「地域」を頻繁に使うが、何回聞いてもその意味するところがわからない。どうやら、「そのあたりのこと」を「地域」と言っている。論理的に行き詰まった時に、このことばを使うと通ってしまう。そういうニュアンスがある。地域政策、地域開発などと使うが、その「地域」が定まらなければ、開発のしようもない。コミュニティも同じような意味合いがある。論理的につながらないところがつながるような感じがしてしまう。多義的にことばの意味が使われている。学問の世界では、使わないで済むならば使わないことが多かった。
- ・ ところが、3・11の東日本大震災以降、コミュニティに関わる議論が増えてきた。そこから混乱が始まる。まず、コミュニティと Community が同じか違うかということだが、もともと違うはずがない。英語のコミュニティ、ドイツ語ではゲマインデ。ところが、3・11以降の議論では、カタカナのコミュニティの意味が広がったというか、あいまいになってきた。絆=コミュニティ、あるいはコミュニケーションの変形、類語としてのコミュニティの使われ方が多くなっている。これでは大変なことになる。英語圏では、絆やコミュニケーションをコミュニティに含ませることはあり得ない。人間と人間の間を表現することばは多い。ソサエティ、アソシエーション、フレンド、グループ、フェロー…。それぞれ、状況によって違う意味を持っている。だからコミュニティも英語の意味に限定しておかないと日本の学問のガラパゴス化になりかねない。国際会議で議論できなくなる。カタカナ英語の流行は問題である。例えば、

オルゴールは英語圏では通じない。ミュージックボックスである。

### ●Communityとしてのコミュニティを考える

- ・ ぐちゃぐちゃになったコミュニティの概念を元に戻したい。一番まじめにやってきたのが社会学で、社会学辞典にある根本は「地域性」と「共同性」の二つ(資料1)。共同性だけだとソサエティと同じ意味。われわれは、社会と言うとき、人間と人間の共同性を意味する。それに対して、コミュニティは地域性という限定性を持っている。だから、地域性の限定がないものは、英語のコミュニティにはならない。そう考えてもらえば、厳密ではないがニアイコールだろう。その地域性には二つの意味がある。ひとつは「地域特性」ということで、これは、一宮と北海道では場所ごとにコミュニティの中身が違うことを意味する。もうひとつは、範囲が問題で、「空間的限定」ということ。共同性にも二つ意味がある。同じようなものが共同する「類似性」ということ、また、異なったものを含めてひとつとなる「異質性」ということ。コミュニティやソサエティの共同性は、この異質性にウェイトを置いている。似た者だけが集まっているのでは、必ずしもコミュニティやソサエティには合わない。例えば、この「伊藤塾」はコミュニティか、考えてみていただきたい。最近よく使われているのが、インターネットコミュニティ、ラインコミュニティ、フェイスブックコミュニティ。これらは、地域性にも共同性にも合致しない。ソサエティはともかく、コミュニティには、少なくとも地域性、共同性、異質性が必要で、同じ者だけが集まって作っているのはコミュニティの概念に合わない。
- ・ カタカナのコミュニティの例として、広井良典氏、山崎亮氏などが、特に、3・11以降、有名になって来た人たちである。ある特定の時間を決めて、志を同じく、趣味あるいは手段を同じくする人たちの集まりで、老人会も女子会も子ども会もみんなコミュニティになる。これは、本来のコミュニティではなく、アソシエーションやフェローという英語に対応するもの。こういうことが、政府の審議会などで議論されるというのは由々しきことだと感じる。例の秘密保護法ばかりで、一人歩きをするとどうということになるか。わかりやすい例では、地図に丸い白抜きができるということで、カーナビも特定の場所はぼかされてしまう。軍事秘密の場所の穴空きの地図は戦時中にもあった。私は陸軍幼年学校の生徒だったので手に入れることができた。
- ・ 広井さんは、3つのコミュニティを取り上げている(資料2)。生産のコミュニティと生活のコミュニティ、農村型コミュニティと都市型コミュニティ、空間のコミュニティと時間のコミュニティで、この三つめが問題である。生産

のコミュニティと生活のコミュニティ、農村型コミュニティと都市型コミュニティは、今日お話しする空間の限定性と関連がある。問題は「時間のコミュニティ」で、一定の時間、仲間が集まって何かをするというもの。これは、外国には通用しないナンセンスな議論だと思う。

### 資料1 コミュニティの定義

コミュニティ community コミュニティの社会学的含意は、一定地域の住民が、その地域の風土的個性を背景に、その地域の共同体に対して特定の帰属意識をもち、自身の政治的自律性と文化的独自性を追求すること、に示される。コミュニティの規定自体多義的でそのことがコミュニティ概念の曖昧さにつながっている。ヒラリー(Hillery, G. A.)は94通りの規定を整理して、「地域性」(area)と「共同性」(common ties and social interaction)が最低限の共通項であることを発見している。コミュニティ思潮という脈絡では、低迷期と高揚期の繰返し(離脱と回帰のサイクル)である。1960-70年代のわが国では、巨大都市を中心とする社会構造の変動により、伝統型の「地域共同体」(およびその擬制的延長)が衰微し、したがって、住民にとって新しい規範性をもつコミュニティ形成の必要性が強調されている。新コミュニティは、伝統型共同体のように固定した社会=経済的基盤に照応しておらず、むしろ、①住民の思想と行動という価値理念の面での追求(地域生活過程における住民の思想と行動の新しい体系、というコミュニティ規定)と、②都市的生活環境施設の物的な面での充実(生活環境施設のネットワーク、というコミュニティ規定)の二つの極に突出している。とくに①は、住民運動の「自治」観念の新基盤であると同時に、権力の直接介入(「コミュニティ秩序」の訓練という住民教化)につながる、ディレンマ性ある現代的課題を提示している。→共同体；共同社会；地域社会；都市コミュニティ；都鄙共同体；アソシエーション  
コミュニティ・アクション community action 地域社会において住民が協同して行う活動をいうが、その本質的価値は彼らの主体的参加である。ポブリン(Poplin, D. E.)は『コミュニティ』(1972)において、開始されたコミュニティ・アクションの特徴を①問題解決や具体的目標の達成を強調すること、②地方の住民や集団の自発的参加を求めること、③民主的な方針を志向すること、であるとした。またその他のコミュニティ・アクションとして、ポブリンは自然発生的なものや日常化したものがあるとしている。→住民参加；ソーシャル・アクション  
(石川晃弘『社会学小辞典』有斐閣、1997)



- ① 「生産のコミュニティ」と「生活のコミュニティ」
- ② 「農村型コミュニティ」と「都市型コミュニティ」
- ③ 「空間コミュニティ (地域コミュニティ)」と「時間コミュニティ (テーマコミュニティ)」

表1 コミュニティの形成原理の二つのタイプ

|                  | (A)<br>農村型コミュニティ                     | (B)<br>都市型コミュニティ                      |
|------------------|--------------------------------------|---------------------------------------|
| 特質               | “同心円を広げてつながる”                        | “独立した個人としてつながる”                       |
| 内容               | 「共同体的な一体意識」                          | 「個人をベースとする公共意識」                       |
| 性格               | 情緒的 (& 非言語的)                         | 規範的 (& 言語的)                           |
| 関連事項             | 文化 (注1)                              | 文明                                    |
|                  | 「共同性」                                | 「公共性」                                 |
|                  | 母性原理                                 | 父性原理                                  |
| ソーシャル・キャピタル (注2) | 結合型 (bonding)<br>(集団の内部における同質的な結びつき) | 橋渡し型 (bridging)<br>(異なる集団間の異質な人の結びつき) |

(注1)「文化 culture」は農村 (ないし農耕 cultivate) と、「文明 civilization」は都市 (city ないし civitas) と対応するが、ここでの趣旨は、前者は「個別の共同体に完結するもの」、後者は「複数の共同体が会うところ」に生成する (普遍的なもの) といった意味である。ちなみに culture の語源はラテン語の動詞 colere (耕す) で、その原義は「世話をする」であり (伊東 [1985] 参照)、「ケア」と重なる。この論点は本書の中でさらに展開したい。

(注2)「ソーシャル・キャピタル (社会関係資本)」は人と人との関係性 (信頼、規範、ネットワーク等) に関する用語で、様々な議論の承継があったが特に近年において社会科学分野で広く使われるようになったのはアメリカの政治学者パットナムの著作を通じてである (パットナム [2006]、内閣府国民生活局編 [2003])。

(注3)「コミュニティ」という言葉や概念について、この表での (A) のみを「コミュニティ」とし、(B) は含まない場合もあり、それは意味の定義の問題であるが、ここでは (農村型コミュニティ、都市型コミュニティという具合に) 両者を含めて「コミュニティ」という言葉・概念を使う。

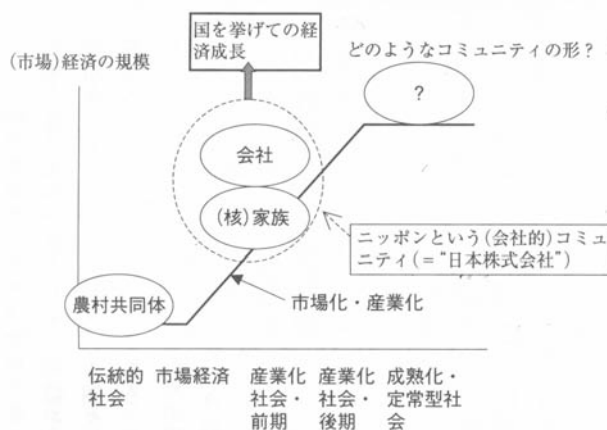


図1 経済システムの進化とコミュニティ  
— 地域からの“離陸”と“着陸”

(広井良典『コミュニティを問い直す』2009、ちくま新書)

## 2. コミュニティの伝統的な意味

### ●歴史学、社会学、地理学

・もともとコミュニティはどこから来たのか。歴史学に蓄積があり、共同体と言われてきた。洋の東西を問わず、今日の集落に発する。これが制度となって自治会、町内会と呼ばれるものができる。これが自然発生的なものである。イギリスでは、大都市圏ではないところは、今でも基礎自治体として機能しており、人口500人以上の集落は自治権があり、議会を持っている。ここで決まったことは行政的にオーソライズされる。500人を割ると、大きな自治体の下部組織となる。ロンドン、マンチェスターなどの大都市はやっかいで、最終的には「小学校区」に集約される。小学校がコミュニティセンターの役割を果たしている。フランスの基礎自治体はコミューンと呼ばれる。ドイツ語はゲマインデ。では、どうやってできたか。コミュニティを考える場合に、人と人を直結すると間違ふ。間につなぐものが必要。つなぐということは、生き続ける=生存ということであり、これは一代ではなく、先祖代々生き続けること。これが媒介となって人と人が結びつく。こうなると、仲がいい悪いと言ってられない。ここからはずれると命が危くなるということ。だから、村からはみ出した者は、ロンドンのような都に行き、そこで落ちぶれて暮らすことになる。江戸時代の人足寄せ場もそれに近い。彼らは、犯罪者ではない。村からはみ出した者が、戸籍無し無宿人となって働くか、物乞いになる。これが、農村型コミュニティ=I型のコミュニティである。歴史学では、このI型が大部分を構成する。これがしっかりしていないと社会が成り立たない。これは、洋の東西を問わない。当然、姿・形は違う。日本は稲作をベースとした農村型であるが、牧畜をベースにしたヨーロッパ、あるいは小麦生産を中心とした農村型、狩猟をベースにしたものもある。そして、これを維持するためには、民主主義では上手くいかないケースが多いので、一般的には封建制と結びつく。歴史学の方では、共同体は否定の対象であり、近代にはあまり関心がない。

・歴史学ではコミュニティのI型が重要であるが、歴史の発展によって都市型であるII型が出てくる。都市型とは、社会が発展、安定すると支配者の集住、商人の集住という現象が起こる。支配者が住めば、家来、召使い、使用人がぐつついて来る。これが「都(みやこ)」となる。そして、ものが余ってきて、それを交換するために「市(いち)」が立つ。近代以前の都市の形成はこの二つが主体で、他には宗教による寄進に基づく都市がある。支配者は少ないので、都は数が少ないが、市の方は結構ある。彼らの生活は、I型コミュニティの食糧生産に支えられるので、I型がしつ



かりしないとどちらも成り立たないことになる。

- ・社会学の方では、「地域社会」という言い方をする。社会学は古いものには基本的に興味がないので、近代社会に対応して、先進国ないしは資本主義を前提とする。広井良典さんのコミュニティ論は、社会学の影響を受けているようだ。社会学では、農村型と都市型の双方の関係については、あまり議論しない。田舎では農村型、都市に行けば都市型という感じである。中身は何かと言えば、地域社会ということで、地域という限定性が入ってくる。ここでソサエティとコミュニティの区別をしている。
- ・では、私のいた地理学はどうか。行政村に対して、自然村という言い方をする。行政村は、明治以降、行政区画に基づいてできたもので、自然村は歴史学で言う共同体、集落に似ている。地理学では、都市の中の地域社会にはほとんど関心がなく避けてきた。
- ・まとめれば、コミュニティについて、歴史学の蓄積が大きく、これは世界共通である。どちらかと言えば、ネガティブにとらえており、共同体は破壊の対象となってきた。社会学は現状を見ながら、実際にあるのは農村型と都市型で、近代化が進めば都市型が増えて、農村型は衰退していくという見方がされている。

### 3. 地歴学からのコミュニティ試論

#### ●原型：農村型と都市型

- ・「絆」と言われるものは、全て包括してコミュニティということで処理しようとする。英語圏では、絆をコミュニティとすることはない。田舎であれ、都市であれ、身の回りの地域社会を言うのであり、ドイツ語のゲマインデ、英語のコミュニティ、日本語の共同体も同様、封建的なものである。ソサエティに相当するドイツ語はゲゼルシャフトであり、これは共同性はあるが空間的な限定性には拘らない。近代社会では、利益に基づく共同性が中心になる。今日配布した『ゲノッセンシャフトの可能性』の論文は、殆ど目のを見なかったが、21世紀のコミュニティ論に対応するものと考えており、ゲノッセンシャフトとしてのコミュニティを書いている。身の回りの「近所」のことを書いている。ゲマインシャフト的なものは、メンバーが自覚しているわけではないが、ゲノッセンシャフトはそれに近いようなものを人間の知恵で相談してつくりましょうというものであり、そういうものを作らないと社会、世界が崩壊していくということである。知恵を出し合い、労力を出し合い、ボランティアでいいから、身の回りの社会を自覚的につくろうというものである。日本社会は単一民族に近いが、旧植民地のような多民族化の進行しているところでは、低賃金労働者を巻き込んで近所を作っていないと社会

がもたないことをヨーロッパは自覚している。

- ・先ほどの農村型のI型のコミュニティは、[人×生存×人]と表せる。ここからはみ出すと死んでしまうということであり、これが出発点だと考えていただきたい。では、都市型のII型のコミュニティは、どういう特色を持っているのか。食糧は周りの農村に依存する。都市は行政中心とマーケット中心であり、周りにI型のコミュニティを付属品として一杯持っている。これがないとまん中は生活できない。余談になるが、かつてイタリアやギリシアにあった都市国家。なぜ、都市と国家が結びついたのか。例えば、フィレンツェは、中心部はアジアとの貿易で儲けるが、食糧調達は周りの農村をベースにせざるを得ず、周りの農村は封建領主と同じように領地として支配することになる。近代化すれば、都市は都市だけで食えるようにならないといけない。だから都市国家は中途半端と言える。II型は、[人×日常生活×人]で、日常生活とは、毎日の生活が何世代、何百年にも渡って続くというものである。I型もII型も、地域特性と空間的限定性、共同性を持つ。歴史学の共同体は、間に土地を介在させているので、[人×生存×人]となるが、社会学のコミュニティ論は、間を考えないで、人と人を直結する。だから、コミュニティの本質に迫れない。肝心のつなく接着剤のところがあまり見えていない。社会科学をより設定し、絞っていくのと、社会の現象に限定して調べていくところに違いが生まれる。その両方をつなぎ合わせていこうとするのが地歴学である。

#### ●遷移型

- ・私の考えるコミュニティは資料3に整理した。縦軸に農村型と都市型、横軸には伝統社会と近代社会を置いた。伝統社会は自給自足+ $\alpha$ （プラスアルファ）、近代社会は市場経済+ $\alpha$ （プラスアルファ）。伝統社会は基本自給自足で、余ったら売る。市場経済社会にも自給自足部分がないわけではない。実は、この伝統社会と市場経済社会の二つ間に現実の姿がある。ここでは「遷移」と表示してある。実際は、突然、I型からII型になるわけではなく、この「遷移」に最もリアリティがある。この間の橋渡しのところをどう認識し、どう処理するかが社会科学では非常に重要なことである。型を見つけて、型を証明しても役に立たない。伝統と近代の間に、先ほどの都市国家のことが書いてある。兼業農家のむら、出稼ぎなど。自給自足でやっていたが、現金収入が必要だから、兼業あるいは出稼ぎに出ざるを得なくなる。ヨーロッパのドイツ、スイスのむらを調べてみると、兼業で成立しているむらは結構多い。ポルトガルやスペイン、南イタリアなどは出稼ぎで埋めている。また、農園主が、奴隷ないしは奴隷に近い低賃金労働力の商品生

産によって儲けるスタイルがもうひとつのタイプであり、プランテーション、ファゼンダ(ブラジルのコーヒー農園)が該当する。

- 余談になるが、『ユニクロの光と影』(文藝春秋社)という本がある。ユニクロは、このプランテーションと同じように縫製加工をしている。日本にあるのは企画営業、管理部門で、モノを作るのは世界中の低賃金労働力である。近年は中国の賃金が上がってきたので、バングラディッシュに主力を移そうとしている。次はアフリカか。今から20年ぐらい前、「ファブレス」というのが流行った。工場を持たない製造業であり、ユニクロの場合は製造小売をグローバルに展開した。製造卸は以前からあり、問屋が農家に下請けに出して作って、集めて出荷する。さらに進めれば製造小売になる。一宮で例えれば、本町にあったスズヤ、ハヤシマンのクラスの洋服屋がユニクロになったようなものである。ユニクロは宇部市のノン・ベーシックから始まっている。だから、やりようによっては、ノン・ベーシックでも世界的企業に成り得る。ただ、光に対する影の部分も凄い。重役クラスも3、4年平均でクビ、従業員の定着率も半分程度という。一宮の人たちは人がいいから、そこまで阿漕にできなかったと言えるかもしれない。

- 話を戻す。言いたいことは、この表の「遷移」のところに意味があるということ。農村型の現代の姿は、近代的な農村で、家族経営。基本的に金儲けのために農業をやる。だから、農業なら何でもいいわけではなく、金儲け農業をやらなければ近代社会としては成立しない。そこで TPP が関わってくる。外国の農産物に小農経営で対抗できるかどうかということ。ヨーロッパのスイス、イタリアは、兼業農家で近代的農業をやるような仕組みを作っている。農協が農家の生産を助けて、野市の農業でも金儲けができる仕組みを導入している。それで TPP のようなものにも抵抗してやっていける。日本でもそういう農家はいるが、農協は補助金をもらう方にウェイトをかけるから近代化しない。減反政策が典型。むしろ余った米は政府が買い上げて、品質管理の方法を考えて輸出することを考える。そうして、和食は日本の米じゃなければとればマーケットは広がっていく。農協は、輸出産業としての農業を考えて来なかった。これを大規模にやれば、アメリカ型の近代農業になる。アメリカの場合は、余った農産物は政府が買い上げて保管することを昔からやっていた。脱脂粉乳というのを憶えておられるだろうか。支配国にタダ同然で配っていた。支配戦略のひとつである。

資料3 地歴学からのコミュニティ整理

|     | 伝 統  | 遷 移  | 近 代   | 強<br>弱                    |
|-----|--|--|---|---------------------------|
| 農村型 | 「むら」：自給自足経済の基礎的空間単位<br>(うら、はま：海産物を含む自給自足経済)<br>＝コミュニティ I   | ・ 兼業農家集住型の「むら」<br>コミュニティ I + コミュニティ II<br>・ プランテーション・ファゼンダ<br>(農業資本家・経営者と奴隷労働)<br>コミュニティ II + コミュニティ I | ・ 近代的農村：商業的農業者の集住(小農経営)、工業品は都市に依存＝コミュニティ II<br>・ 近代的農場：資本主義的大農場(農業資本家+農業労働者)＝コミュニティ II<br>・ 近代的漁業と水産会社(資本主義的大規模漁業)＝コミュニティ II  | ↑<br>自律・自主性<br>↓<br>相互依存性 |
| 遷移型 | 例：古代の都市国家<br>都市＝市民(コミュニティ II)<br>食料は周辺の奴隷労働による農場<br>：ルネッサンス期の都市国家<br>都市＝商人(コミュニティ II)<br>食料は周辺農村の権力的支配(貢納による収奪)  | ・ 無秩序な農村の都市化＝スプロール<br>・ 里山資本主義<br>(里山資源の商品化、里山のリゾート開発)   | ・ 郊外(近郊)：農村的景観・環境と都市民の居住・生活＝コミュニティ II(田園都市)   |                           |
| 都市型 | 「まち」：食料を自給できない人びとの集住とその空間単位(生存は「むら」に依存・寄生)＝コミュニティ I<br>・ 権力者(とその家族・従者の集住＝「みやこ」型)＝政治・行政都市)→貢納<br>・ 宗教者(とその関係者の集住＝門前町・鳥居前町)→寄進<br>・ 流通の仲介者(とその家族・使用人等の集住＝市町)→仲介料(コミッション) | ・ 「まち」の旧市街+「都市」の新市街<br>・ インナーシティ<br>・ スラム街 等々  | ・ 工場コミュニティ(「むら」の中の工場と労働者の「まち」形成)<br>・ ビジネスコミュニティ(「工場」コミュニティの集積と関連産業の成立、労働者の集住→コミュニティ II)<br>・ 第二次産業中心のビジネスコミュニティ→工業都市<br>・ 第三次産業中心のビジネスコミュニティ→商業都市<br>・ ビジネスコミュニティの肥大化(都市圏・大都市圏)とサブコミュニティとしての近隣区・近所(neighborhood)機能の再認識 | ↑<br>強<br>↓<br>弱          |

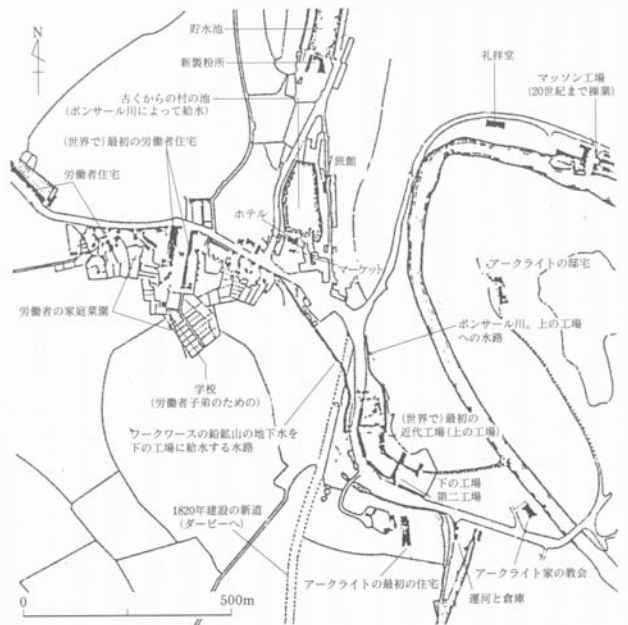
← 強 共同性(絆) 弱 →

●近代都市型:ファクトリーコミュニティ、ビジネスコミュニティ

- ・次に、近代の都市型。ここが一番ややこしいところで、先進国で共通して課題となっている。[人×生活×人]がII型を考えるカギであった。ここに、「生産」が入ってきた。また、メンバーが「人」から「企業」に変わってきた。生活もあるが、どちらかというとな生産が主体となる。それで、「企業×生産×企業」に変わった。この大きな切掛けが産業革命。ここで、企業は国になる場合もある。EUの母胎であるEC。くつつく単位が国になってしまったのがEC。要するに、ECに入らないとヨーロッパの中で国として生き残れない、スイス以外の国々はこちらに入らないと存続が難しいと感じている。かつて侵略されたドイツが嫌いだと言っている。産業革命の結果、こういう現象が起きてきた。企業の生産が増大すればする程、儲けが大きくなる仕組みが資本主義。アダムスミスは近代経済学の出発点と言われているが、彼は手工業での大量生産で資本主義を考えていた。産業革命で大量生産が飛躍的に伸びる考えは頭の中になかった。手作りで大量生産して儲けが増えれば国富が増すと考えた。というのは、ワットの蒸気機関の発明より、スミスの『国富論』が少し前。
- ・産業革命による商品生産。ものには二つの側面がある。商品と単なる「もの」。後者は使えば役に立つ。使用価値である。しかし、使用価値を持っているものは常に交換価値があるわけではない。使用価値が100あっても、交換価値がゼロのものがある。空気がそうである。その逆で、使用価値はほとんどゼロだが交換価値が高いものとして、コンピュータの中で投資されるお金がある。産業革命によって、商品生産が増大した。その結果、コミュニティのメンバーが人から企業に変わっていく。そういうことを表現しているのが、「ファクトリーコミュニティ」ということばである。始まりは、アークライトによるもの。近代紡績業の始まりで動力は水車。これより古いのは、ローカル・コミュニティと呼ぶ。ファクトリーコミュニティの対概念としてローカル・コミュニティが出てきた。ファクトリーコミュニティとしてイメージしやすいのは、俗に言う「企業城下町」だが、これは偽装表示に近い。マスコミがそう呼んで使っているだけである。企業城下町をどう英語に訳せるか、どこに城があるのかと言いたい。別の言い方を探せば、「カンパニータウン」だろう。
- ・ファクトリーコミュニティは、[企業×生産×企業]と表せる。この生産のためには資本家、労働者の日常生活が必要で、ここで労働者の街ができる。アークライトのつくったファクトリーコミュニティとして有名なのが、イギリスのクロムフォードというところにある(資料4)。ダーヴェント川が流れ、国立公園で景色の良いところ、日本の上

高地のようなところであり、その一画、川沿いに工場があって、動力の水車があり、鉛の鉱山から地下水を取っている。工場に歩いて通える範囲に、ホテル、購買、労働者住宅がある。

資料4 ファクトリー・コミュニティ



図II-12 アークライトのファクトリー・コミュニティ(ダービーシャー、クロムフォード)  
出所:クロムフォード、アークライト博物館資料。

- ・ここで問題になるのが労働者住宅である。村の人たちは牧畜で生活が成り立っているからこのような怪しいところに働きに来ない。だから、ロンドンから浮浪者の家族を連れて来て住ませて、低賃金で雇う。また、ロンドンには孤児が溢れており、教会が預かる。これが、孤児院の始まり。そして救貧法に基づいて、各教会で預かっている孤児を連れて来て働かせる。孤児たちは、数も数えられないので、ここで教育を行う。イギリスの義務教育は、工場労働者の教育から始まったと言える。日本の社宅はここから来ており、このイギリスの状況と同じと言えるかもしれない。社宅の評価は難しい。ものが何もないので、この購買部で「ツケ」で買うしかない。給料と相殺である。購買部は経営者がやっていて高い。それに対して、労働者が相談して作ったのが生協(生活協同組合)である。イギリス北部の労働者が団結して生活物資を安く手に入れることから始まった。マンチェスターの郊外にロッジデールというところがあり、そこが生協運動の発祥地となっている。こうして、農村の中に、ファクトリーコミュニティができて、今度はこれが増えていく。初期の工場は水車なので、まだ自然破壊は大きくない。また、水の取り合いになるので、ひとつの村にひとつの工場しかできない。労働者の日常生活を快適にするために街づくりをしなければいけないと

いう問題意識がここから始まると言えよう。

- ・ 蒸気機関の発明がなぜ問題なのか。生産活動がどんどん活発化し企業が集中する。蒸気機関がこれを可能にした。蒸気機関が中心になって企業が一カ所に集まるというムーブメントが70～80年続く。その後、電気になる。こうしてできたものを「ビジネスコミュニティ」と言う。日本で言う工業地帯は、実はビジネスコミュニティと言える。ビジネスコミュニティは、近代的な都市や大都市が相当する。名古屋、大阪、江戸から変わった東京。しかし、ここではコミュニティの主体が企業になるから人間が抜けている。だから、国の政策もこのように集まってきた企業が立ち行くようにバックアップすることが都市政策の中心になっていく。そう考えると、今の公共投資もどういふものかがわかってくる。では、ビジネスコミュニティで何が起るか。ここに集まってきた大量の労働者の生活がある。稼ぐ方は会社が雇ってくれば成り立つ。では生活の部分はどうするか。ファクトリーコミュニティの時には、それぞれの企業が社宅の形で面倒をみた。三池炭鉱などの産炭地域にあった「炭住」もそうである。しかし、企業が集まり過ぎると、無責任になって、そういうことにカネを掛けるのが勿体ない、合理化の対象となる。労働者の生活が放置されて、スラムの形成になる。明治維新の時に、岩倉使節団がアメリカ、ヨーロッパを回って来た。イギリスをお手本として見に行くが、ロンドンのイーストエンドの持参なスラムを見て、これは手本にならない、イギリスのまねをしたら大変なことになることがわかった。だからドイツへ行った。ドイツは、イギリスのこういう悲惨な状態を見て産業革命を経験している。ドイツで、スラムではない労働社会を見た。ドイツでは、ビスマルクによって社会政策が実行された。われわれはこの資本主義社会で、不十分とは言え、高齢者の年金や医療保険など福祉型政策を利用できているわけだが、その出発点が19世紀後半のビスマルクにある。家庭菜園のもとになったクラインガルテンもビスマルクの時代のもので、シュレーパーガルテンともいう。シュレーパーという医者が工場労働者の衛生上の視点から、家庭菜園によって環境を良くすることを考えた。1860年代だと思う。このように間接投資をすることが、長い目で見ると、企業対企業のビジネスコミュニティをより安定的に維持することがわかった。
- ・ これに比べるとイギリスのスラムの状況、貧富の差の大きいことは、私がシェフィールドに居た時にも実感した。シェフィールドは1,000mぐらいの山があつて、下にドン川が流れていて、そのあたりに工場がある。労働者住宅がくっついており、駅もここにある。そこより少し上に大学があつて、この大学から上の方に資本家の家が建っている。

私はそこに住んでいた。というのは、大学が外人教師用に用意してくれた宿舎がここにあったからである。石造の3階建てで、玄関には絨毯が引いてあつて、窓にはステンドグラス。労働者住宅との較差が大変大きい。ビジネスコミュニティになって、スラム対策、労働者の生活環境への対応が大きな問題となった。

#### ●サブ・コミュニティとしての近隣区(Neighbourhood)、近所

- ・ ビジネスコミュニティからコミュニティ問題が発生してきた。今日、持って来た英語の本に書いてあることは、絆に対応するコミュニティのことではなく、都市における貧しい労働者たちの生活、街をどうするかというものである。これがイギリスにおけるコミュニティ問題なのである。これに対して、イギリスでは「近隣区(近隣住区、近所)の整備」に尽きるということになる。労働者、それに類する人たちが住んでいる場所をどうやって良くするか。田舎では、ローカル・コミュニティは伝統社会から引き継いだ「むら」が基礎自治体として機能しているので、そこで決めればよい。しかし、都市ではできないので、小学校区というものを大事にする。日本ではすぐ統廃合で小学校をなくしてしまうが、イギリスは小学校区を新しい都市型のコミュニティとして機能させようと考えている。小学校にコミュニティセンターが併設されて、コミュニティ図書館、ボランティアの語学学校があつたりする。
- ・ そういう意味で、日本でも小学校区を見直すことが考えられる。資料5は、都市の例として京都の町内会。資料6は川崎市の例。町内会別のデータを図に落とし込んでみた。対象地は川崎駅から30分程のところである。商店街はある、街路樹も整備されている、児童公園もある、医者も結構いる。地域の人に聞いてみると、特に何かがあるわけではないが、不便ではないと言う。まあ、満足している。隣に公園があるから、日曜日には散歩したり、ジョギングもできる。近隣区(近所)とは、そういうものだろう。そうならば、無理に要望を出して対策を考える必要はない。それを小学校区で見たのが、資料7である。東京と大阪の郊外の住宅地からランダムに小学校を選んだ。小学校から半径500mの範囲内で調べてみた。東京も大阪もよく似ている。最低必要なコンビニ、スーパー、銀行、飲食店、郵便局、交番、ほとんど揃っている。小学校区は、小学生が歩いて通う範囲なので、空間的にも根拠がある。イギリスは小学校区でやっているが、われわれは何を目標にするか。町内会では狭いかもかもしれない。それにいろいろな人間関係やガス支配でやっかいである。再編成をするとしても、いきなり小学校区では問題もあるだろうから、時間をかけてやるべきだろう。そして小学校がなくなったら、空き教室を上

手く利用してコミュニティセンターに活用する。そういうことが起こりうると思う。一宮市では、地域ふれあい課、地域協議会など、「地域」を掲げた政策をしているが、まだ中身が煮詰まっていない。どうしているかという、どこかのコンサルタントに作ってもらっている。市民が作れる仕組みを考えるべきだろう。

資料5 近隣区事例 (京都の町内会)

図2-1-1 京都における番組の編成図 (明治2年)



資料:『京都の歴史』第7巻、488頁(学芸書林)所収の図を転載。  
三条通を境界に上京と下京に区分。

図1 京都における町内会成立期の地区構成  
岩崎ほか編 (1989) による。

表1 京都市における町内会の構成

| 町内会名  | 世帯数 | 隣組数 | 会長選任方法   | 市政協力員 |
|-------|-----|-----|----------|-------|
| 竹屋町   | 27  | 3   | 投票による選挙  |       |
| 山名町   | 15  | 1   | 順番       | 兼務    |
| 花開院町  | 35  | 4   | 選挙       |       |
| 新美濃部町 | 49  | 6   | 順番       | 兼務    |
| 大北小路町 | 40  | 4   | 7年分をクジ引き |       |
| 西北小路町 | 56  | 5   | 投票による選挙  | 兼務    |
| 伊佐町   | 39  | 5   | 順番       | 兼務    |
| 樋之口町  | 22  | 3   | 順番       |       |
| 曼陀羅町  | 18  | 2   | 順番       |       |
| 硯屋町   | 25  | 2   | 話し合い     | 兼務    |
| 紋屋町   | 46  | 5   | 順番       |       |
| 聖天町   | 54  | 5   | 組代表の話し合い |       |
| 百々町   | 26  | 2   | 順番       | 兼務    |
| 東西町   | 65  | 7   | 順番       |       |
| 妙蓮寺前町 | 70  | 4   | 順番       | 兼務    |
| 大猪熊町  | 54  | 7   | 組代表の話し合い |       |
| 芝葉師町  | 31  | 4   | 選挙       |       |
| 幸阿町   | 18  | 1   | 順番       | 兼務    |
| 東石屋町  | 44  | 5   | 順番       | 兼務    |
| 西石屋町  | 12  | 1   | 順番       | 兼務    |
| 慈眼庵町  | 38  | 4   | 順番       |       |
| 藤木町   | 39  | 6   | 選挙       |       |
| 北舟橋町  | 14  | 1   | 順番       | 兼務    |
| 堀川団地  | 96  | 8   | 順番       |       |

岩崎ほか (1989) による。

資料6 近隣区事例 (川崎市)

図4 川崎市川崎区の近隣社会

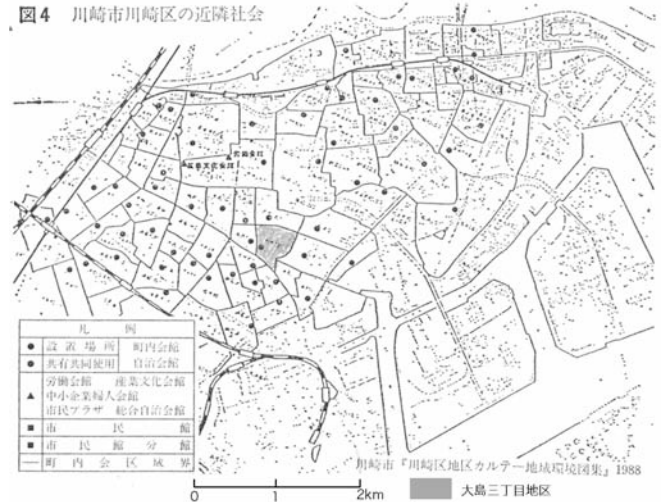
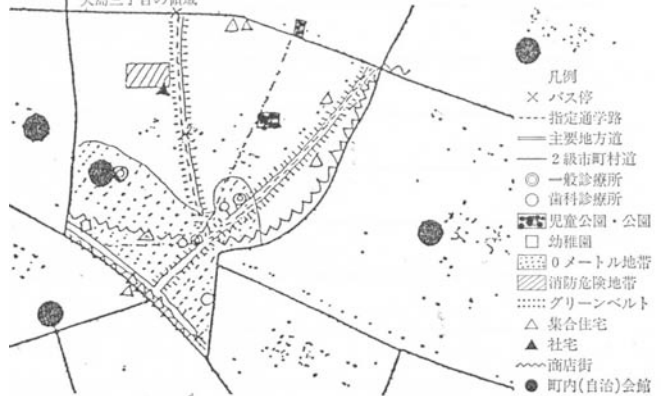


図5 近隣社会の環境要素  
—大島三丁目地区—



資料7 小学校区事例 (東京と大阪)

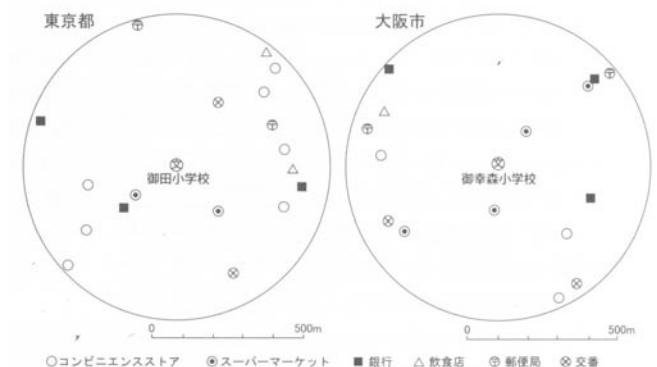


図4 東京都と大阪市の小学校区を中心とした生活必需的施設の立地  
びあ (2005) と昭文社 (2007) により作成。



## ●都市圏というコミュニティ

・都市圏ということについて触れておきたい。資料8は、総務省が地域政策のひとつの指針として考えた「定住自立圏構想」である。濃尾平野は、生まれてから死ぬまで、そんなに不満なく生活できるところのようである。つまり定住圏を実体化しているところといえる。三河も含めて、愛知県は定住条件が揃っているところといえる。では、何が足りないか。アクセントが足りないと思う。このような定住自立圏構想をもっと使うべきだろう。イギリス人は、city and it's region という言い方を好む。Manchester and it's region など。そうすると、community and it's region。都市には、それに必ず付属した空間が存在している。その空間は何か。市街地だけではなく、通ってくる通勤者の住まいを含めての region である。だから、都市と都市圏という言い方が必要である。日本でも、都市圏という考え方で国づくりをしようと考えたことがあった。1977年の第三次全国総合開発計画がそうである。私も委員として動いた経緯がある。資料9は、一宮周辺の江戸時代の集落分布で、基礎的なコミュニティの存在を示している。今でも確認できる。

## 4. 結語

・今日の講義で最も言いたいことは、最近はやりのコミュニティ論に惑わされないで、歴史の中で持ってきたコミュニティの意味をよく考えて欲しいということ。そうしないと学問のガラパゴス化が進む。マスコミの責任が大きい。また、出版社の編集者の力量も大きく、最近粗製濫造の新书が多い。『里山資本主義』という本のタイトルもおかしい。産業資本主義、金融資本主義という場合、産業、金融は資本主義をつくるが、里山が資本主義をつくるのか。里山を資本主義的に使うことは可能だが、里山で資本主義は成り立たない。そういう意味で偽装表示だ。今回は、生活空間その2ということで、「郊外」の話をしたい。これも今日のコミュニティと同じで、最近の郊外論はちょっとおかしいということになりそうである。

資料9 一宮周辺の江戸時代の集落分布



図1 一宮都市圏の中心地システム  
林・伊藤 (1976) による。

資料8 定住自立圏構想

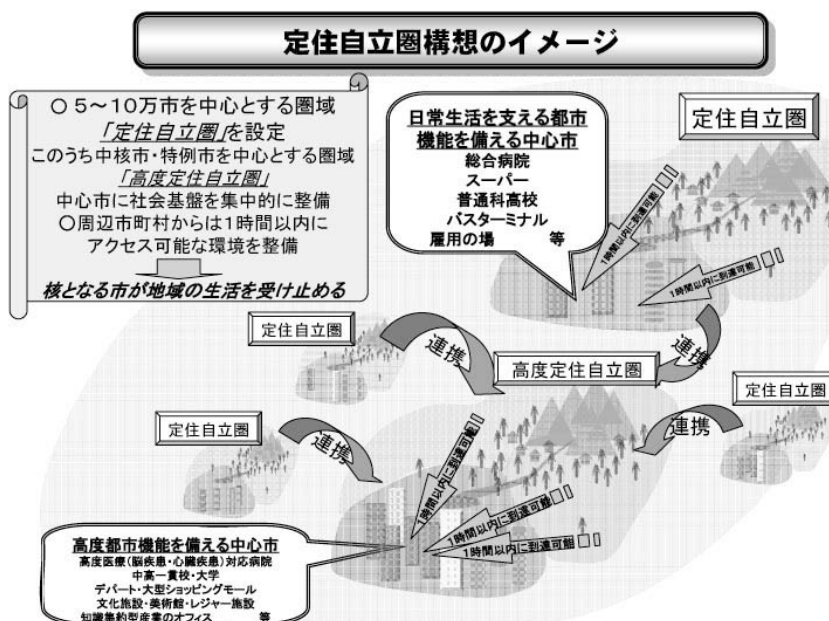


図3-A 旧西ドイツの都市圏

Peter Schöller and others; Federal Republic of Germany Spatial Development and Problems, FERDINAND SCHÖNNIGH・PADERBORN, 1980

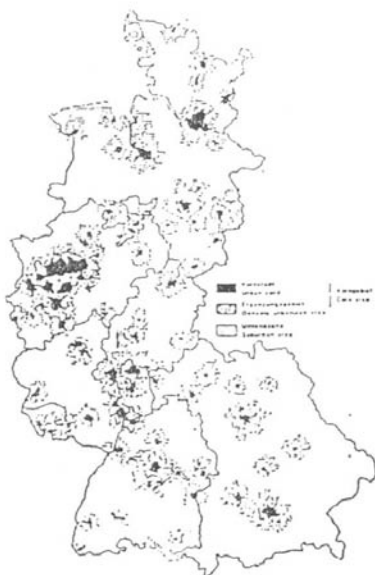


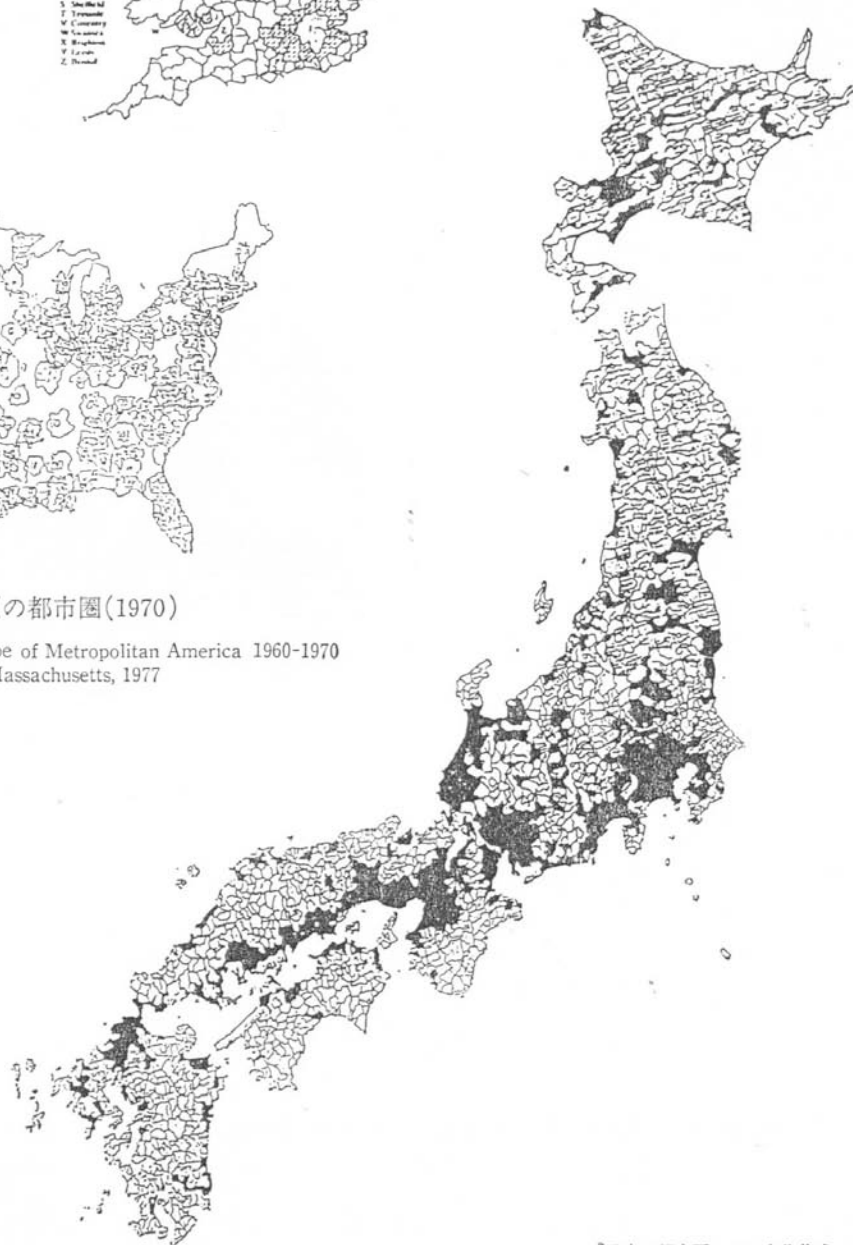
図3-B イギリスの都市圏

R. Prestwich, P. Taylor: Introduction to Regional & Urban Policy in The United Kingdom, Longman 1990.



図3-C アメリカ合衆国の都市圏(1970)

B.J.L. Berry, Q. Gillard; The Changing Shape of Metropolitan America 1960-1970 Ballinger Publishing Company Cambridge Massachusetts, 1977



『日本の都市圏』1981より作成。



## 第6回

### 「郊外」について

#### 0. はじめに

##### 1. コミュニティ再論

##### 2. 生活空間としての郊外

- ロンドン
- ウィーン、ミュンヘン、ベルリン
- 日本

##### 3. 制度化された郊外としての田園都市

- レッチワース
- 郊外の制度化
- 社会改良運動
- 日本の都市と郊外

##### 4. 郊外型まちづくりの可能性

- イギリス: シェフィールド、マンチェスター
- ドイツ: ルール工業地帯、ボン

##### 5. まとめ

- 21世紀型ベーシックインダストリーと郊外型まちづくり

#### 0. はじめに

- ・リーダーのタイプには三つあるように思う。ひとつは、ヒットラー、スターリンなどに象徴される指導者。私が金沢大学にいた頃、全共闘のリーダーがそんな性格だった。自分の意見に合わないとは度でもやり直させるタイプ。次が提案型のリーダー。仕事を進める場合に、提案の有効性を説明しながら人を説得して進めていく。もうひとつが、民衆依存型。戦後民主主義の申し子のようなもの。アメリカ型教育が浸透した人に多いタイプ。民衆は神様で賢いので、民衆の声を集めてそれに従えば間違いないと考える。
- ・戦後の民主主義の中で、人柄がよい市長さんが多く、こういった人は民衆への信頼度が非常に高い。しかし、それは市民が判断を間違わないことが前提となる。だから、いろいろな機会をとらえて、民衆の判断力を錬磨することをしないと社会が良くならない。この講座が難しくて頭を素通りすると思われる方がいらっしゃるかもしれないが、専門的な話とそうでないところをつなぐ工夫を自分なりにしていただけるといい。
- ・この講座では、市民の皆さんに失礼にならないように、手抜きをせず資料を作成して、私の考える精一杯のことをお話しているつもりである。それを手掛かりにして、知識ではなく、判断力を磨くことを心掛けていただけるとよいと思う。私のところにある3、4万冊の本をこの図書館に寄贈した。社会科学系の本でやや専門性が高いが、もうじき市の図書館で読めるようになり、市民の方のお役に立てるのではないかと思う。人口が37万人の都市を横並びで見ると、失礼だが一宮市はやや劣るといえる特徴がない。市の総合計画づくりなどに向けて、一宮市市民が判断力を身につけてくれることを期待している。

#### 1. コミュニティ再論

- ・現代におけるコミュニティは二つある。広義と狭義のコミュニティ。広い意味でのコミュニティは、富の蓄積と富の消費が空間的に一緒になっている。富は、そこで生産活動をして得てもよいが、外から持ってきても構わない。なるべく所得水準の高い人が一宮に住んで、名古屋から富を持って来ればよい。都市は行政区画ではなく、都市の実質は都市圏である。その範囲は近似的には通勤圏である。
- ・図式化すると、富の生産と周りにそれを支える通勤者が住んでいる。資本主義社会ではまん中が主人公となる。その周りには小さい固まりの自治会や町内かなどが狭義のコミュニティである。わかりやすいことばで言えば近所、近隣住区。現実には、こういうものは面倒くさい、煩わしくなる。封建社会においては、共同体は生き死ににかかわるのでなるべく肩寄せ合っていた。今でも田舎には残って

いる。そういう煩わしさから逃れて快適に生きられる状態が市民社会の理想だとされた。

- ・産業革命以降、都市が荒廃した。スラムができた。隣に無関心になった。日本で今まであまり問題にならなかったのは、市役所なり公的セクターが手当をしてきて、外れたものにはケアをする仕組みが発達している場合には、コミュニティなどなくても個々の住民だけでよかったからである。しかし、カネがなくなって行き詰まってしまい、それで近隣住区が見直されるようになった。いわば社会改良運動と連動している。先進国では、治安が良くて行政のケアがしっかりしていれば近所はあってもなくても良いといえる。前回お話したように、昔、川崎のある地区で調べたときには、医療も公園も商店街もあって問題ないし、駅にもバスで近い。住民には特に不満がなかった。当時は上手くいっていた。
- ・イギリスでは、1979年に労働党に替わってサッチャーが登場して、福祉政策をやめた。公的セクターのバックアップの手を抜くことで、イギリス経済の立て直しを図った。私が1978年にイギリスに行ったときは、労働党政権によって、街は奇麗だが、ハウストゥレット（貸家）の看板が目立った。全く活気がない。ただ、街の治安やゴミ処理、公衆トイレの管理は大丈夫だった。ところが6年ほど経った1984年に行ったときには、それまでにはなかった黒い袋に入ったゴミが公園に山積みになっていた。公衆トイレも汚い。公的セクターの手当てが薄れて、街が荒れてしまっていた。そうすると、そういうところに旧植民地の人たちが入ってきて、だんだん治安も悪くなっていく。そういう危険性に対して、コミュニティ、近隣住区の必要性がうたわれてきた。しかし、イギリスではこの時代には、自助努力で犯罪に対抗せよということになった。
- ・実は、安全のために自宅にアルソックの緊急通報装置を導入した。営業マンに聞くと、外国での主たる需要は個人警護らしい。外出時に守ってもらう。ある意味では不安産業であり、事業を拡大するのはおかしな話ではある。日本では町内会で見回りをする。それは煩わしい面もある。しかし、8割は個人の自由だが、2割ぐらいいは折り合いをつけて共同性を持たせることが必要だろう。コミュニティのリーダーとしては何か事業をしないとイケないと考えがちだが、これはやめて欲しい。なるべくやることは少なくする。最低限のことしかやらないというコミュニティリーダーが必要であろう。共働きなどが多い中、近所のつき合いは全てできるものではない。しかし、やるべきことはしっかりやるという町内会が望ましい。
- ・狭義のコミュニティの範囲としては、私は小学校区がいいと思う。子ども、高齢者も歩いて行ける範囲である。レジ

ュメにゲノッセンシャフトとあるが、これはドイツ語で協同組合の協同性のことである。封建時代の古いコミュニティはボス支配だった。それに対して、ゲノッセンシャフトは同格の人たちが集まって、2割程度は擦り合わせるという「のりしろ」を意識的に作ることで近所の意味合いを復活させると考えればいいと思う。無意識でのボス支配から、もう少し判断力を持った民衆の横並びの集まりであり、そこには住民の主体性が入っていると言える。

## 2. 生活空間としての郊外

### ●ロンドン

- ・郊外は、英語で言えばサバーブ (suburb)。わざわざ英語で言うのは、日本語の郊外が英語のサブバースと同じかどうかちょっと怪しいからである。名古屋がしっかりした郊外を持っているかと言えば、そうではない。郊外がなぜ問題になるのか。砂漠のオアシスには、緑、水、その中に住まいがある。実は、このセットが郊外の条件である。逆のことばは「場末」、*outskirt* あるいは *urban fringe*。
- ・資料1-1はロンドンのど真ん中。資料1-2はロンドン全体の緑地・公園の分布を示している。この中に、コモンとパークがある。パークとコモンでは同じような緑地でも発生が違う。コモンは薪や草を取ったりする村の入会地、共有地である。ドイツではゲマインドバルト（共同体の森）という。一方、パークは王がうさぎやキツネ刈りをしていたところを市民に緑地として提供したものなど。私たちがこどもの頃、遠足で行った浅井山公園は東浅井の入会地。所有権は多分、森林平さんで利用権が村に与えられていたのだろう（注：浅井山公園の温古井池は、浅井万金膏の製造者で尾張藩御殿医の森林平の所有する庭園であったが、戦後荒廃し、昭和37年に一宮市に寄贈され公園として整備された）。こういうのは濃尾平野にたくさんあったはず。それがイギリスのコモンの源流となる。
- ・アメリカのボストンには中央に大きな公園がある。ボストンコモンという。余談だが、その一画に教会と墓地があり、そこに厚さが1cmほどしかない墓石がある。これは開拓農民が貧乏だったあかしである。ハーバード大学の前にも大きな公園がある。ケンブリッジコモンという。また、夏目漱石がロンドンに住んでいたところにはクラパムコモンがある。その他、ロンドンでは荒地地であるヒースなどが、市民に緑地を提供している。これらをひとつずつ調べた本がある。
- ・資料1-1は、資料1-2のまん中の斜線の部分で、ひとつのマスが1kmである。黒く塗りつぶしたのが公園・緑地だが、この黒いところの密度が左半分と右半分では大きく違う。左半分はバッキンガム宮殿やハイドパークがある上

流階級の居住区で公園・緑地が非常に多いのがわかる。この左半分の状態が郊外の原形、出発点となる。右半分は元々ロンドンの下町である。郊外のモデルは、緑の中の大きな屋敷があるというものである。これをロンドン市民に提供するというムーブメントの中から郊外という発想が出てきた。資料1-2の外周部分にグリーンベルトがあり、意図的に都市計画で作ったもの。このグリーンベルトに沿って、緑と水と住まいを用意して、公共交通の仕組みを発達させる。さらにその外部にニュータウンを建設する。20世紀の前半のことである。郊外とは、ロンドンの東の住民の人たちに緑と水を提供する社会改良運動と結びついて出て来た概念である。

- ・五分も歩けばすぐに公園にぶつかるが、右半分はそうでない。さらに右の方に行けば、イーストエンドと言われるところでスラム街がある。戦前は立ち入るのが難しいぐらいのところ、70年代、80年代でもまだ怖いところだった。この前のオリンピックが行われたところは、このイーストエンドの場末を改良する目的もあった。これも余談だが、オードリヘップバーン主演の映画「マイフェアレディ」のマイフェアは、メイフェアの訛ったもの。イーストエンドの貧しい八百屋の娘が、左側の上級階級の大学の先生に認められ、トレーニングを受け、ことばの訛りを直してもらった。その先生の住んでいるところがメイフェア。下町訛りでマイフェアとなる。
- ・ロンドンの緑地公園の持主は誰か。王室が所有して開放しているところや、個人の邸宅の庭が、日の出から日の入りまで開放されているものなど、いろいろなかたちがある。18世紀あたりになると、田舎から出て来た貴族が住宅を持つ。3階建てぐらいの長屋を建て、共同で程度の良い集合住宅をつくる。クレセントといい建物がカーブを形成している。そして、その住宅の前を共同の庭にする。現在は貴族が住んでいるわけではなく、アパートやホテルになったりしている。このように共同で作って皆で使う庭もあり、地図に描かれていないので、こういったものを含めて非常に緑が多い。また、三角形の半端な土地にも木を植えて緑にしている。だから非常に緑っぽいというのがロンドンの印象である。ロンドン、パリやローマに比べて、市街地の中に緑が多い。ベルリンも緑が多い。ただ、緑が多ければいいことばかりではない。暗くなると外出も控えるなど、治安との関係が出てくる。しかし、都市の環境としては、緑と水と住まいのミックスがモデル、ひとつの理想型といえる。

#### ●ウィーン、ミュンヘン、ベルリン

- ・他の都市はどうか。資料2はウィーン。ウィーンの森は市

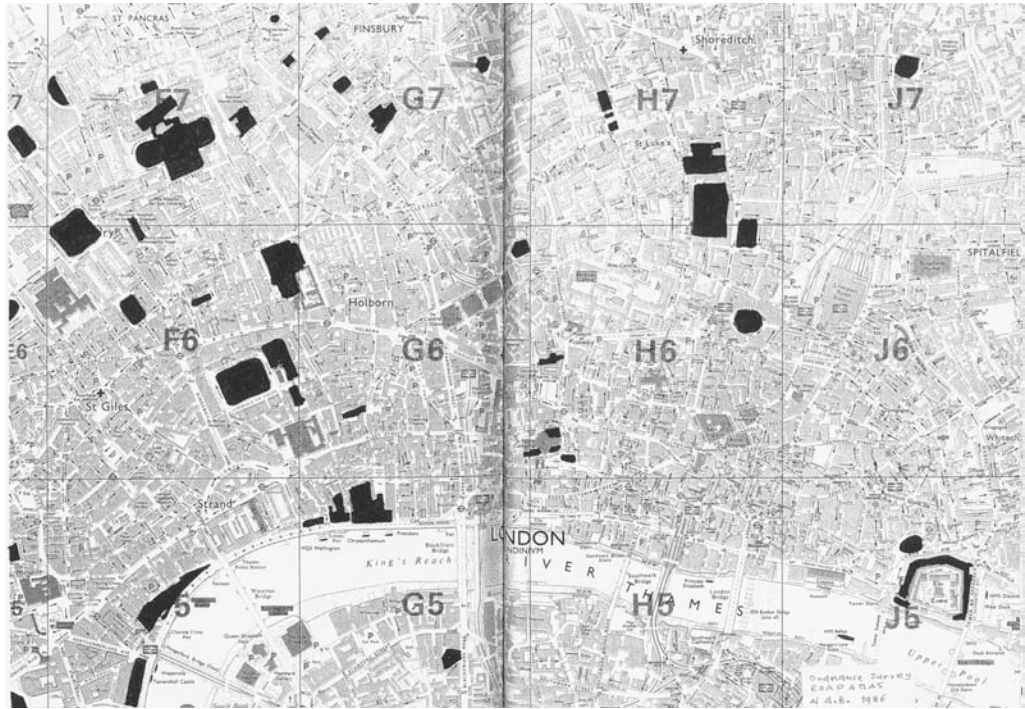
街地の端の方にあるが、それほど大きな森ではない。資料3、資料4がミュンヘンとベルリンである。ミュンヘンは人口が100万人ぐらい。ここも緑が多い。ベルリンも緑とともに水もある。まん中をシュプレー川が流れており、それが緑を付帯している。また、街の郊外に湖がたくさんある。ミュンヘンの場合は、図の右上のところにイギリス庭園という大きな公園があり、水と緑を供給している。市街地の中に結構、緑が多い。

- ・しかし、緑が多いということは、都市経済の立場からは逆になる。公園を有料にすれば別だが、緑は直接、富を生まない。都心部の一等地が市民に開放されているのは、長い目で見ればプラスかもしれないが、都市経済の立場から言えば必ずしもプラスではない。ここに、銀座に高層ビルを建てる話がポシャったことが書かれた本がある。銀座のような一等地に高々7、8階のビルでは都市経済の視点からはもったいないという見方もできる。また、誰も言わないが皇居も都市経済ではもったいない。さて、舛添さんはどう考えるだろうか。ただ、「ものごとはお金だけじゃないよ」となれば、一宮市の空いているところをどうするかについても新しい知恵が出てくる。しかし、従来のように、「お金こそが一宮」では変わらない。

#### ●日本

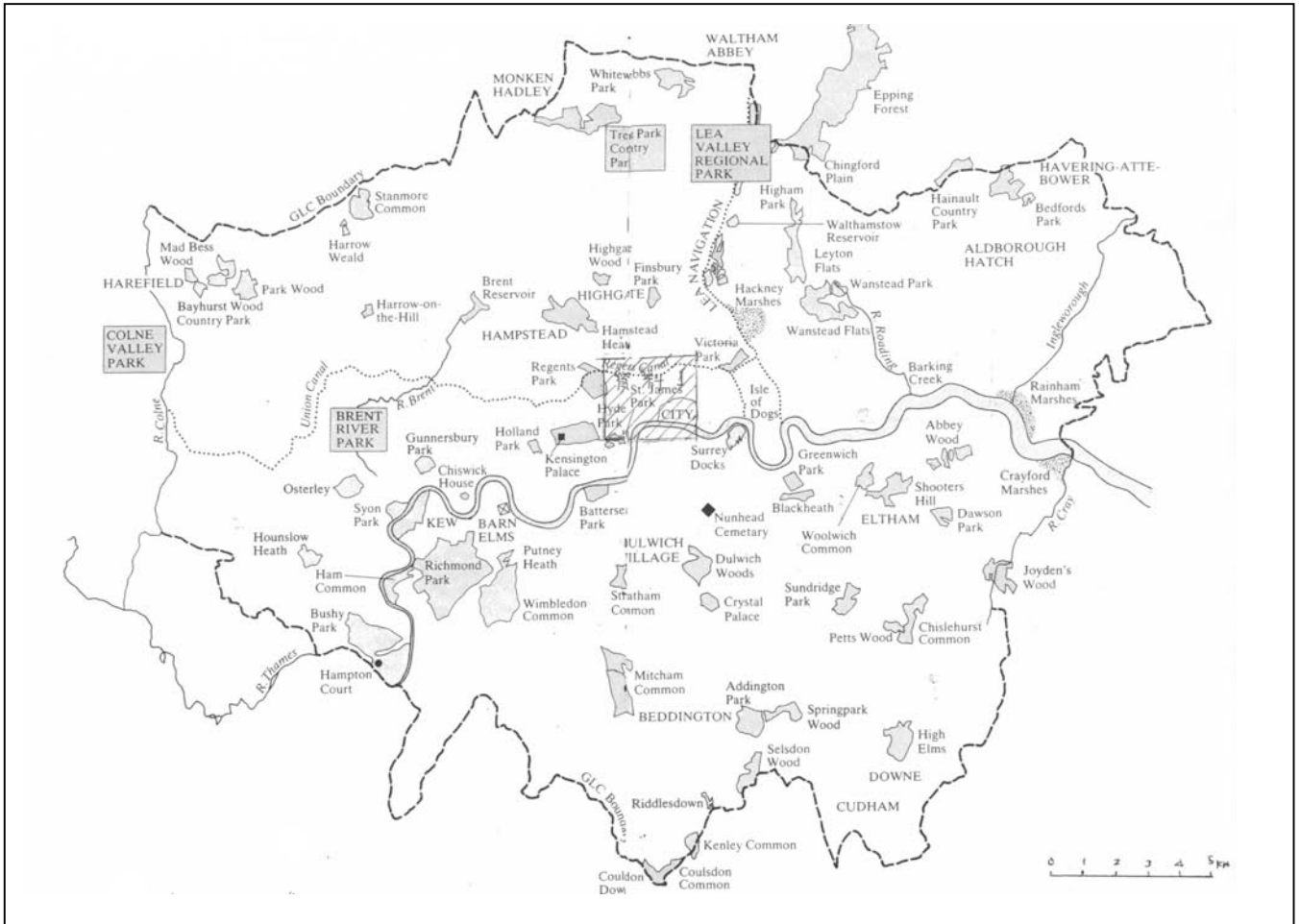
- ・三浦展という人が比較的眞面目に郊外問題を研究している。余談だが、一橋大学の社会学出身で、大学の先生ではない。同じ一橋大学の社会学部に佐藤毅(たけし)という教授がおられた。既に亡くなられているが、私の小学校の同級生である。郊外が郊外らしいかたちで整備されているのは東京しかない。他は、どこも場末である。何となく市街地が外にひろがったもので、これをスプロールという。無秩序に農村でも都市でもない状態が続いている状態である。大阪は、隣に神戸や京都があつて、ごちゃごちゃになっている。
- ・その東京の郊外がおかしくなっていることが彼のこの本に書かれているのだが、なぜおかしくなったのか。新自由主義、市場経済に基づいて都市をつくっていくこと、規制緩和が郊外を悪くしているといえるだろう。都市工学において、経済オンリーで都市を考えない思想が強まれば、緑を確保する方向に沿うのではないか。日本の学問の世界、政策意思決定の中に、都市工学の発言力、市民権がもっと高くなると、長い目で見て、日本の都市でいい環境はつくれないといえる。私は地理学の出身なので、都市工学の人ほど責任は感じなくてよいのだが、岡目八目で問題はよく見える。

資料1-1 ロンドン中心部の緑地・公園



2000m

資料1-2 ロンドン全体の緑地・公園



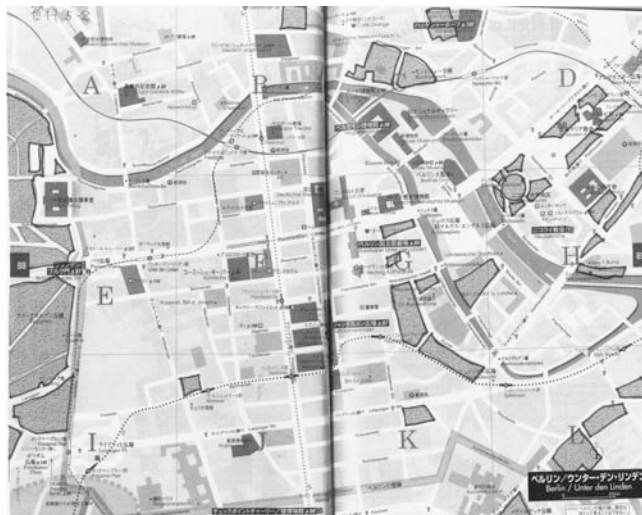
資料2 ウィーン中心部の緑地・公園



資料3 ミュンヘン中心部の緑地・公園



資料4 ベルリン中心部の緑地・公園



0 2000m

### 3. 制度化された郊外としての田園都市

#### ●レッチワース田園都市

- ・ ロンドンを図式化するとウェストエンドとイーストエンドとなる。ウェストエンドは、先ほどお話したように郊外のモデルとなったところである。住まいと緑と水を市民に供給するために、まず緑の中に一戸建ての住宅をつくっていくところから郊外が発達した。そのためにまん中から公共交通を引く。まず郊外電車が発達して市民の足を確保していく。これがさらに伸びていって、その外側にニュータウンが1920、30年代につくられた。日本にも影響を与えており、現在の一橋大学のできた国立市などに鉄道会社がニュータウンをつくっている。田園調布もそうだ。関西では阪急の小林一三が宝塚などをつくっている。世界的にニュータウンがつけられた時代といえる。名古屋は無いに等しいが、稲沢にニュータウン的な小規模なものがあるようである。
- ・ イギリスでニュータウンが制度化つまり法律に基づくニュータウンづくりが始まり、郊外がつくられていく。そのきっかけになったのがレッチワース(資料5-1-資料5-4)。これは、国営ではなく、民間の投資家が田園都市協会を設立してつくった。ロンドンと大学都市のケンブリッジのほぼ中間に位置しており、ロンドンから列車で1時間ぐらいのところにある。資料5-3にモデルが描かれている。まん中に中央公園があり、1マイルの範囲内に住宅と庭園などがあり、その周りに大きな農園、工業学校などが付帯する。人口32,000人で、面積400ha。資料5-4にあるような住宅を配置して、緑と水と住まいをつくっている。今も同じように残っているので見学できる。駅前には商店街もあり、近くに公民館、学校がある。全体が緑である。イギリス人はとにかく緑が好きである。映像で見ると、イギリスは冬でも緑である。私は、緑の山は、当然、茶色になると思っていた。山が茶色になったらシェフィールドからボンの大学に移るつもりだった。だが、色が変わらない。どうやら、ロンドンの芝生は品種改良で年中、緑のままである。

#### ●郊外の制度化

- ・ レッチワースは、ロンドンへの通勤を念頭においたまちづくり。ただ、衛星都市ではつまらないと考えることもできる。ロンドンで所得を稼いで消費するが、自前で富をつくり出しているわけではない。だから都市としては不完全ともいえる。それで別に、職住型のウエルウィン・ガーデンシティをつくった。企業誘致と住宅開発をジョイントでやる仕組みを持っている。
- ・ この二つは戦前につくられたもので、第二次大戦後にロン

ドンの過密の課題に対応して、いくつもニュータウンをつくった(註:31のニュータウンが法で定められている。レッチワースは含まれない)。その中で一番遠いのがミルトン・キーンズでロンドンから100kmも離れている。今どうなっているかわからないが、ここには日本企業もいくつか出た。かつては、暁星(ぎょうせい)学園の小・中・高・大学があった(註:2002年までにすべて閉鎖)。このニュータウンは、成功したと言われているが、20万人の計画人口が12、3万人で止まっており、また、ロンドンから遠すぎるという批判もあり、問題はあるようだ。

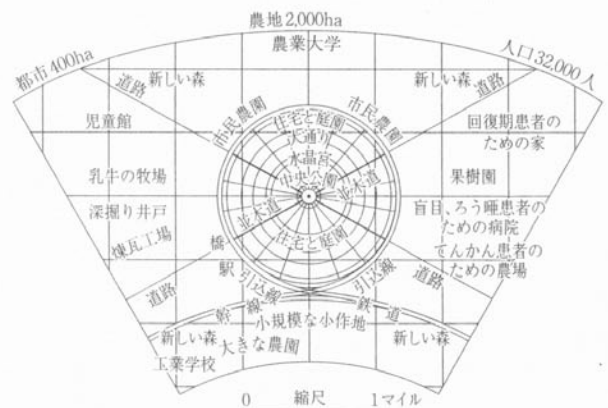
・職住近接で戦後はニュータウンがつけられたが、どうなったか。お話しのように、サッチャーが登場して、市場原理に基づく新自由主義で、ロンドンの過密に対するこういった社会改良的な政策をやめてしまった。それで必ずしもイギリスの郊外づくりが上手くいっている訳ではないが、このレッチワースの住宅はそこそこ性能が良い。イギリスの街を見る場合、日本人は誤摩化されてしまう。労働者街に、二階建ての石造りで、小窓がいくつかついた立派な住宅があるが、実はドアの数を見ると、三世帯、四世帯で住んでいることが分かる。外からの見掛けと違う。シェフィールド大学に行ったときに提供された住宅もそうだった。ひとつの建物に外国からの教員が四世帯一緒に住んでいた。

資料5-1 レッチワースとイギリスのニュータウン



資料5-3 レッチワースのモデル

ハワードが構想した田園都市のモデル



資料: E・ハワード『明日の田園都市』  
訳: 三浦展

資料5-2 ロンドンのニュータウン



資料5-4 レッチワースの住宅





## ●社会改良運動

- ・ 1920、30年代にかけて、先進国は共通してニュータウンをつくった。別の見方をするとこれは世界恐慌対策でもある。仕事を与え、同時にニュータウンもつくる。日本の小林一三や田園調布の渋沢栄一にそういう意図があったかどうかかわからないが、社会改良運動、スラム対策と連動していた。日本人の感覚からすると瀟洒な一戸建て住宅がつくられていく。この流れがロンドンの後、マンチェスター、バーミンガムなどの主要都市にひろがっていく。その範囲は通勤をベースにした都市圏であり、都市圏からはずれると中心都市との関係が薄れて、あまり上手くいかない。
- ・ さらに世界史の中で考えると、社会改良が必要とされたのは、ロシア革命の影響が強い。スラムの放置がロシアのような社会主義国につながるという懸念があった。これは、どの国も共通して持っていたようである。余談だが、日本の治安維持法で捕まって獄死した京都大学の学生で岩田義道という人は、一宮市の北方町出身である。他にも、市川房枝さんや木曾川の山田盛太郎さんがおり、あまり知られていないが、一宮からは左翼運動の先達が何人か出ている。
- ・ 年金や失業手当などの社会政策に対して、当初、イギリスは不熱心だった。イギリスの産業革命のダメだったところは、資本家が儲けることばかりで、労働者は自助努力せよとしていた。じゃあ、失業したらどうするか。アメリカやカナダなど新大陸へ渡った。イギリス、北欧、ドイツ、アイルランド、イタリアが渡った。「母を訪ねて三千里」の背景もここにある。その次に、中国、日本が渡った。だから、本国が上手くいかなくると海外で働くことは証明されているともいえる。話がそれるが、いま行き詰まった日本はどうするか。海外に行くしかない。しかし、知識労働か肉体労働かで大違いである。若い人はもっと考えないといけないだろう。CMにあるような「いつやる？ 今でしょ！」では実は遅い。今やるというのは、戦略と戦術では、戦術に関わること。多くの民衆は、戦術的なことには関心も高いが、問題は戦略のところである。将来を見ながら何をやるか、これが日本人は不得意である。いや、どの国の民衆も不得意かもしれない。
- ・ 社会改良運動はドイツの影響が大きい。社会政策を経済学の中に位置づけたのは、イギリスではなくドイツである。アダムスミスは、ものづくり資本主義については正しいが、現在の博打的なユダヤ資本主義においては、スミスのロジック、経済学の体系はどうも違うのではないかと思う。社会政策も元は、ビスマルクになるものである。イギリスより50年遅れて産業革命を迎えたドイツは、19世紀のイギリスが手本にならないとして社会政策を考えた。いまでも、

ドイツやフランスは、サッチャー、レーガンのように市場原理主義に簡単にはなびかない。それがEUに通じている。じゃあ、ビスマルクは何をやったか。石炭による製鉄をやっていたルール工業地帯で、その労働者の健康状態を調べた。緑、休養、家庭菜園による栄養の自給自足を促進した。前に話したが、シュレーバーという医師が健康維持のために家庭菜園を奨励した。これがいま、シュレーバールデン、クラインガルテンと言われるものである。これを取り入れて、田園都市型のまちづくりを労働者街でやった。だから、ルール工業地帯の労働者街には、他の街とは違った街並みが見られる。

## ●日本の都市と郊外

- ・ 日本の都市と郊外はどう違うのか。計画的に都市の周りを整備することに取組んだのは戦後であり、住宅公団が東京の近郊にヨーロッパ型のニュータウンをつくってきた(資料6)。日本の場合は、緑を剥がして、住宅部分を多くしようとし、高層化する。これが失敗のもとで、高層化するとスラム化する。ドイツやイギリスにも高層住宅がある。そこに、ドイツだとトルコ系の人が入ると、ドイツ人が出ていってしまっただけで全体がトルコ系になってしまう。イギリスだとパキスタン系が入ると出て行ってしまふ。日本の場合は、緑を剥がして、高層化して具合が悪くなっている。東京以外では、大阪では千里、名古屋では高蔵寺などでニュータウンがつけられたが、国の政策として及ばないうちに終わってしまった。1980年代がひとつの転換期だった。田中角栄の後、三木、福田首相の頃、第三次全国総合開発計画では、都市圏のバランスを良くしようという政策が始まった。郊外もその中に位置づけられていた。まん中から計画的に人を配置し、そこに至る交通体系を整備する。東京、大阪は地下鉄、郊外電車が整備されており、周りに対する手当は名古屋よりはるかにいい。それでも、岡崎方面の方がまだ良く、一宮、稲沢では駅も増えていない。
- ・ 郊外というのは、ぼんやりしていると都市的な土地利用がスプロールしてひろがってしまう。私の住む笹野では、都市とも田舎ともいえない変なプレハブみtainな住宅が年々増えている。特に、県道のバス沿線に増えていく。こういう状態を将来、どう考えればいいのか。昔、地域開発の専門家がイギリスから来た時に、新幹線に乗って郊外を見に行きたいと言われた。彼がイメージする郊外とは、緑があって、その中に農村的な建物があり、通勤者のための住宅があるというものである。仮に新幹線で西の方に行くとするどどこまで行くとそういう景色が出て来るだろうか。姫路の先あたりまで行かないとないのではないのか。そうすると東京の郊外は姫路の先かということになる。



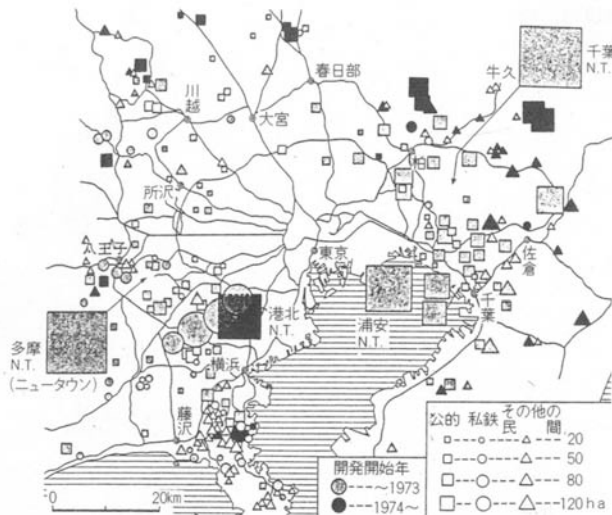


図9-5 東京大都市圏における大規模住宅地開発（20 ha 以上）の分布（出所）本文註14）の資料より作成。

#### 4. 郊外型まちづくりの可能性

##### ●イギリス:シェフィールド、マンチェスター

- 実は、日本のような無秩序な土地利用は海外にもある。私の居たシェフィールドがそうである。シェフィールドはイギリス製鉄業の発祥地であり、産業革命の世界の発祥地である。この界隈の土地利用は無秩序で茫漠としている。19世紀の初め頃には、イギリスでも場末しかできなかった。郊外を計画的に外に分散させるとすると、どこまで広がるか。経験的には、通勤時間は1時間がリミットである。歩いて1時間か、路面電車で1時間か、郊外高速鉄道で1時間か。日本ならば新幹線か。問題は会社が通勤手当を出してくれるかどうか。
- マンチェスターは、アークライトが蒸気機関を動力とする紡績機を発明し、18世紀の終わりから19世紀の初めに本格的なビジネスコミュニティになっていく。資本主義の世界では、人間よりもビジネスのコミュニティが先にできる。まん中にビジネスが集まる。その外回りに労働者住宅ができる。マンチェスターは世界の綿工業の中心として大きく拡大した。通勤方法は、最初は公的セクターの手当はなく徒歩である。そうすると市街地の直径はだいたい5 km程度。そこに労働者住宅が詰め込まれるからスラム化する。この状況は、以前紹介したように、エンゲルスの『イギリス労働者階級の状態』に詳しく書かれている。それで、商業関係者が中心になって、馬車鉄道、次に路面電車で通勤の足を確保する。それから郊外電車がひかれる。イギリスの郊外電車は1825年に始まる（営業は1830年）。物資は運河で輸送された。これに関連して、木曾川の水運がいつまでどう機能していたかが気になる。水運が情報も運んで

くるから、市川房江さんや三岸節子さんのような人を生んだかもしれない。高速鉄道とともに発達したのが郊外であり、社会改良運動、スラムクリアランスと結びつく。

- ロンドンもシェフィールドも、市街地のまん中は緑が多い。シェフィールドは製鉄の街だったが、日本などに取られてさっぱりダメになった。それで廃止された工場の跡地を市が買い上げたり、借り上げたりして緑地にした。製鉄の街だけど、意外と緑が多くてきれいな感じがする。

##### ●ドイツ:ルール工業地帯、ボン

- ルール工業地帯は、ここも製鉄がダメになった跡地を市が公園にしている。ドルトムントに、10年ぐらい前まで、ドイツ最大の製鉄所があったが、古くなった施設をそのまま中国に売却した。それを中国で再利用している。その跡地が池のある大きな公園になっている。市が中に入って公園にした。緑が増えて、市民にとっては当然いいが、新しい産業を呼び込む上でも好都合なのである。かつての工業地帯の騒音、煤煙、油のスタイルではない。シリコンバレーも緑の中に瀟洒なビルが散在しているように、21世紀の工業はかつての工業地帯の立地条件とは全く異なる緑の多い公園のようなところに新しい産業が根付く可能性が高い。
- ベルリンもそうだが、ボンでは、第二次世界大戦の時に、燃料として木を全部伐ってしまった。戦後、余裕が出てから植林をして緑を取戻したと聞いた。日本ではそうはいかない。むしろ土地を切り売りして、ショッピングセンターにしたりしてしまう。ドイツの人はそういうことをしない。以前こうだったから元に戻そうと考える。ただ、残念ながら、一宮に郊外型のまちづくりが根付くとは思えないが、ひとつの考え方として上げておきたい。オランダのように、窓に花を置くだけでも雰囲気は変わるだろう。しかし、自分のことしか考えない民衆にしたがってまちづくりをやっているとはできないだろう。

#### 5. まとめ

##### ●21世紀型ベーシックインダストリーと郊外型まちづくり

- 一宮のこのあたりは駐車場が多いが、借り手がなくなったら、市が間に入って、所有権は取らずに借りて緑地にすることが考えられる。それを目当てにして新しい産業が入ってくる。新しい産業とは何か。ものづくりは終わった。低賃金労働でものをつくって海外に輸出するのは難しい。これからは、レベルの高いサービス関連である。
- シェフィールドで成功しているのは高等教育と高次医療であり、それを全世界に売っている。街全体を緑にすることによって成功した。シェフィールドの人口は50万人。

商店街は一宮よりはるかにお粗末である。そこに、高等教育と高次医療のベーシックインダストリーをつくった。ノンベーシックインダストリーでは限界がある。さて、一宮であるが、ベーシックインダストリーを繊維に拘るのか。そうではなく、環境に注目して日本の都市の中でいち早く、水と緑を軸にして新しい産業を誘致するか。

- 先ほど例に出したアルソックの正規職員が 12,000 人いるらしい。こういうのを誘致してここでトレーニングする。安全産業は有望だし、海外に日本企業が出ているので輸出もできる。アルソックは、既にアフリカの大使館や領事館のセキュリティをしているらしい。新しい意味での第三次産業である。一宮に進出したコナミしかり。オリンピックに出るような選手のトレーニングをする。ルール工業地帯に行った時に、そういうスポーツ施設に安く泊めてもらった。そういう将来の展望もあり得るのではないかと。

(了)

## ■特別講義:シンポジウム

### 1. 問題提起

報告1「工業と都市」(伊藤 清武)

報告2「コミュニティ空間の再組織と〈社会再生産業〉の可能性」(佐々木滋生)

報告3「起・産業コミュニティに学ぶ」(今枝 忠彦)

(発表内容省略)

### 2. 塾長感想

- 東京などから多くの方に来ていただき、地歴学講座がボランティアで続けられるのは、一宮では夢のような話である。逆に言えば、人口が 40 万人近くになって、市民のボランティアで仕事ができる基盤があるということがわかった。
- 一宮の毛織物が最盛期の 1960 年頃、ドイツのシェラー先生が、自国の地理学会に紹介してくれた。また、イギリスのロンドン大学の友人でサージェント先生は、一宮を調査して、日本とイギリスの毛織物業についての比較をされた。当時、重松毛織さんにバックアップしていただき、感謝している。
- 今日の印象としては、学者とは違う実務者の観点の新鮮味があった。社会再生産業については、ボランティアでやれるならばいいのだが、どこかに頼るとなると難しい。私の知っている例としては、長野県の端っこにあった平村は、かつて大手の電気メーカーが低賃金を求めて飯田あたりに進出する中、村民の出資によって電子部品の企業を立ち上げたが、産業構造の転換もあり、必ずしも成功しなかった。また、龍山村(静岡県)の森林組合も、地域内部の資金で立ち上げたが、仕事をつなげるのが大変と聞いた。だから、考え方はいいのだが、永続性という点で難しさを感じる。

### 3. 質疑対応

- 一宮は名古屋の衛星都市の性格を持っているが、ベーシック産業を呼び込むことも必要だと思う。働き場がないので、三河より住宅需要も減ってくるだろう。具体的に、どうやって呼び込めばいいのか。行政や商工会議所、議員などがスピードを持って対応していかなければ地域は勝てない。(会場)
- ベーシック産業とは何か、よくわからない。国は成長産業という言い方をするが、日本にはあてはまらないと考えている。われわれの回りに福祉に従事している人が多い。また、福祉に必要な器具がある。なぜそれを地域でつくらないで中国から買うのだろうか。地域でつくるために、回りがサポートするネットワークをつくる。そこに付加価値が生まれて、地域にカネが回る。もう、自分たちでつくり始

めることしかない。もう大きな産業はあり得ないのではないか。かつては、日本の技術力が中国に買われたが、これから普通の労働力が買われるようになるだろう。ならば、自分たちの地域でつくればいいだろう。働ける場所をつくって、見せていくことが大事だと考えている。それが、今日話しをした、工場を街に戻せということである。(伊藤清武)

- 誰かが頑張るしかないという話になってしまう。行政、首長、経済界のドンが頑張らなければダメだと終わってしまう。しかし、スーパー行政マン、スーパー首長、スーパー……が、頑張るって永続的に勝ち抜ける企業呼んできて、土地も埋まって云々、これは千三つの偶然である。こういう産業、企業を呼んできてこうやるべきだみたいなことを署名を集めて、首長に提案するようなことをしても、それでおしまいである。現実には、もっと切実な問題に直面している。どう暮らす、どう介護する、どう育てる……。そこには、行政も民間企業もできないことが一杯出てきている。震災被害地はその先端である。結局、自分たちがやるしかない。自分たちのコミュニティをどう修復、維持して、人類の「類」として生き延びるための関係性集団をどう作り直すのか。それは、ひとりひとりしかできない。万人に対して、やるべきだという語り方は、ひとりひとり違うと思う。ぼくらができることは、ぼく対あなたとの関係しかない。固有名詞の関係で、いまこの人に何を言うのか、この人と何ができるか。地域振興、まちづくりをやる時、そのレベルじゃないと人が動かない。そうじゃないと、行政がやるべきだと終わる。社会再生は、ひとりひとりがどうやるか、どう関係を紡ぎ直すかということである。その時、思いが通じる言葉は一般論ではなく具体論だろう。どうやって暮らしているかの？ 何に困っているの？ 家族は兄弟はどうなっているの？ などなど。そこに、技術を持っている人、経験のある人が関わって事業を興していけるかである。ボランティアじゃない。そこから産業を興していくしかコミュニティを作り直すことはできないと思っている。(佐々木滋生)
- 質問へのヒントになればと思うことを述べたい。ソニーが出た後に、コナミが来た。コナミはゲーム機だが、なかみはハイテクであり、期待が持てる。せっかく来てくれたのだが、市や商工会議所がコナミのやろうとすることをサポートする気持ちがあるのかなのか、民間企業だから関係ないというのか、そのあたりがひとつの手掛かりとなる。以前、話をしたが、日英地理学会会議でチームズ河口のチャタムの軍港を訪れた際、先方の商工会議所が筋違いのわれわれに対しても、日本でもどこでも投資して雇用を作ってくれればいいという考え方でアプローチしてきた。一宮

に、企業誘致に対するそこまでの気概、エネルギーがあるだろうか。例えば、いま進出して来る可能性のあるのが中国系、インド系だとして、その下で働くのは嫌だというのでは無理である。じゃ、市民がカネを出し合って、社会再生産業を作れるのか。しかも売れるものでなければいけない。その意味では、一宮のこれだけの産業を輸出産業にしなかったのが不思議でならない。どこか、サボっているところがある。売って歩くところまでやらなかった。起業家精神がどこかで薄らいでしまった。このあたりが、産地として衰退していくひとつのカギではないか。具体的にやるとすれば、コナミを手掛かりにすることが考えられる。コナミが将来どうするつもりなのか、それなりの立場にある市や商工会議所がアプローチして聞くことが必要だ。企業をどうつなぎ留められるのかが重要になる。稲沢のソニーや三菱なども同じ。いつまでいるかわからない。ものづくりに頼るのは、長い目で見ると限界かもしれない。ものづくりじゃないとすれば、外国から人を呼び込むしか方法はない。観光以外に何があるか。高等医療はあるかもしれない。ここに来れば、世界中の難病のケアができるというセンター。もうひとつのヒントとして、東京の首都改造計画。東京は、業務核都市で分散させようとした。それによって大宮の操車場跡地が核になった。東京都では八王子は遠すぎたが立川は成功した。神奈川県は横浜・川崎、千葉は幕張。これらはぼんやりしてきてきたわけではない。首都圏という政府がない中で、よくやったと思う。名古屋でそれができるか。一宮が名乗りを上げて、県や名古屋市とタイアップして、業務核都市になるような運動を岡崎や四日市に呼びかけているとは聞かない。都市政策への理解がないことを痛感する。(伊藤喜栄)

- この喜栄塾を始めたきっかけのひとつが、生まれ育った一宮の元気のなさ、地域、都市政策の弱さであった。それに対して、今日わたしたちが掲げた社会再生産業では弱いと思われたかもしれない。しかし、仕事から、いろいろな地域で、多くの提案をしているが、ちゃんとした受け皿がなければどうにもならない。結局、地域の人がどう考えて、どうすれば取組めるのかがカギとなる。この地歴学講座を通して、一宮の地域の方々の思いや活動が見えてくると、有効なアプローチの仕方が見えてくるのではないかと考えている。(今枝忠彦)

#### 4. 学識者発言

●森川滋 (大阪経済大学名誉教授、大阪経済大学中小企業・経営研究所特別研究員)

- 主体をどう作っていくかという問題がある。かつてあった繊維産業の中に主体に成り得るものがあるのかどうか。技

術集積を活かして、動かしていけるか。それがものづくりでいくのか、社会再生というかたちでいくのか、ということがひとつ。

- 都市政策としてどう考えるのか。一宮は産業面で、空白な状況にあるのではないか。大阪では、例えば茨木は高度医療、医薬品の核を形成している。私の息子は、熊本に住みながら、大阪の彩都（住宅、研究開発機能）や神戸の再生医療と関わりを持っている。行政主体というより、医薬産業、医師団との関係の中で政策化していくという戦略もある。
- 生活と密着したところでは、コミュニティビジネスの動きとして、例えば、イギリス北部の産炭地域で、ノン・ベーシックなところから声が上がってきた。それを労働党政権が政策的に導入していった経緯がある。こういったことも参考になるのではないか。

#### ●秋山道雄（滋賀県立大学環境学部教授）

- 昔、大阪で大学院のころ、泉州の産業政策の調査をしたが、その時、伊藤先生が毛織物業について書かれた論文を参考にしながら、一宮と泉州を比較した経緯がある。最近、泉州を見直す機会があったが、30年前の最盛期から事業所が10分の1に減少している。事前には壊滅の印象を持っていたが、状況に合わせて動いている。製品のニーズが変わってきているがそれに合わせて残ってきている。一宮はどうなっているのだろうか関心がある。
- 今日の話の中で、尾西では業者の方々が組合をつくり、積極的な働きをしたことがあった。泉州の場合は、大阪に近いこともあってか、商社に系列化され横つなぎされた違いがある。かつて、一宮に形成された技術、経営ノウハウ、資本、社会資本などが現在も残っているはずで、それがどこに行ったのか興味深い。そういった目に見えないところを上手くすくい上げていけば再生も可能ではないかと思う。

#### ●山本匡毅（山形大学人文学部准教授）

- 一宮のベーシックインダストリーを考えていく上で鍵になるのは、毛織物業の資源をどう活かしていくかであろう。今日のお話に出た長岡、米沢、枚方、岡谷は、いずれも機械工業が強いところ。米沢、岡谷は紡績で培ったノウハウ、労働力を機械工業に移して、地域の産業を形成していった経緯がある。米沢ではNECを企業誘致した。ただ、米沢、岡谷とも下請けは、じり貧状態である。しかし、個々の企業は元気である。それは、脱下請けで死にものぐるいになっているから。中小企業はポテンシャルを持っており、行政主導ではなく、行政がアシストして頑張っているという

のが現状である。同じようなことを一宮ができるのかどうかである。毛織物業、関連企業あるいは関連ない企業がどう行政とコラボできるのか。地域の実態調査をやる中から、ベーシックインダストリーが見えてくるかもしれない。

- ベーシックインダストリーは、グローバルな市場領域で稼ぐという意味で不可欠である。一方で、グローバル資本主義だけでは地域の破綻を招く恐れがある。それをフォローするのが、今日、お話された社会再生産業ではないだろうか。従来、地域政策は、企業誘致による地域間格差の是正をやってきた。しかし、今後の地域づくりには両輪が必要である。ひとつはグローバル資本主義の中で生きていくためにベーシックインダストリーの政策が必要であり、一方で所得再分配の問題に社会政策的な観点から対応することである。つまり、経済政策としての地域政策と社会政策としての地域政策である。ただ、社会政策としての地域政策は自治体に頼れないというのが現状であり、コミュニティビジネスのようなかたちで、自分たちでできることは自分たちでやらざるを得ない状況にある。

#### ●土井幸平（元大阪市立大学教授、都市計画家）

- 大阪で生まれて、東京で都市計画を学び仕事としてきた。一宮は今回が初めて。今日の三人の話は、伊藤さんは全国の工業都市の中で一宮がどういう位置にあるのか、佐々木さんは社会再生産業、今枝さんは「起より興せ」ということであつたと思う。
- 以前から、「地歴史」というネーミングに興味を持っている。地歴史は、伊藤先生の所属される地理学会より、都市工学、都市計画の分野の人たちの方に理解されやすい。今日の先生のお話を聞いて、ほとんど都市計画、地域政策であり、非常に親近感を抱いた。歴史という観点から地理を見るということではなく、地理が歴史を選択する、人や産業を含めて、その「土地」のことを見極めることで未来が見える、歴史をつくっていくのが土地であるのではないかと、それは都市計画に非常に近い。
- 一宮の地域は、木曾川の氾濫原に農業用水を引いて、緻密に農地を形成している。関東では埼玉県の利根地域、地質は違うが、大阪では大和川流域の東大阪あたりに近い。埼玉の利根地域は歴史的には農業地域が中心で、こちらのように昭和初期に工業化を経験していない。その意味では、東大阪とやや似た状況にあるかもしれないが、こちらの地域の方が農業社会をベースとしており、中心がづくりにくい性格にあるように感じる。
- この先のこととしては、「起より興せ」という提案を進めたい。サッカーの試合に例えれば、シュートで終わることが大切である。それが入るかどうかは別である。

「起」でどういう社会再生産業を「興す」かにつながる提案ができれば面白いと思う。

## 5. 塾長まとめ

### ●今後の地歴学講座について

- ・今日はいろいろとヒントをいただいたので、次回以降に活かしたい。今後の予定では、ひとつは、私なりに、「コミュニティ」というものを整理したいと考えている。実は、コミュニティは厄介な問題であり、あまり触れたくないけれど、現代のコミュニティの問題をバラして、オペレーショナルに、組み立てしやすいような形に提案してみたい。それと、3・11以降、市民レベルでコミュニティの関心が高まっており、新書など多くの本が出ているが、あまり出来がいいと思われないので、批判しつつ、有効な提案をしたいと考えている。
- ・もうひとつは、本講座で「この地域に魅力がない」と言われた方がいたが、では、魅力があるとはどういうことかについて、私の外国の体験を通じて、「郊外」ということでお話をしたい。日本では、特に東京、大阪の郊外がだめで、名古屋は郊外をつくるまでに至らなかった。これからは、郊外が重要になるが、行政がやる気になれば市民の協力を求めやすい領域である。残りの講座では、コミュニティの変遷の問題と郊外の問題を現代風に提案したい。これは、地歴学では「未来」に関わる領域である。決め手になるものではなく、皆さんに考えていただく手掛かりになればと考えている。

### ●第5回講義での補足

- ・伊藤（清武）さんは、地方の工業都市の話がされた。どこも工業が集積することで利益が出る。下請け、外注など。アメリカでは取引費用（transaction cost）と言って、機会が多いということが結果的に費用の節約につながると言われている。しかし、ここ20年あまりの間に、町の中の工場がなくなり、虫食いになっている。それをどうするかということで、工と住が一体化したコミュニティが必要ということで産業コミュニティを話された。問題は、従来どおりの「工」で可能かどうかだが、夢をもう一度という工業都市はおそらく不可能だと思う。一宮では、かつて繊維とりわけ毛織物で栄えたわけだが、もう一度、毛織物は無理だろう。虫食いに穴の開いたところをどうするかということがまちづくりの課題になっていることを話された。実は、集積利益がなくても、優良な技術を持っているとか、企画力、営業力があるところは、生き残っていく。しかし、それは数少ない。その例として、タオルで有名な今治がある。生産業者は減少しているが、しっかりとやっている。もうひ

とつ、イギリスのシェフィールドは、製鉄業の発祥地。古い鉄工場が潰れて廃墟のようになっているが、特殊な金属加工は残っている。集積利益が必要ないぐらいに力をつけるとものづくりとして残っていく可能性があるが、まちの雇用効果にアジャストできるかどうかは限界がある。だから、別のものを探さざるを得ない。それがベーシックインダストリーで、所得をその都市で生み出すもの。どうやって見つけていくかが重要。

- ・その手掛かりになるのが、佐々木さんの言われた「社会再生産業」。国土環境再生領域、福祉社会再生領域、地域文化再生領域を上げられた。どうやるかということで、佐々木さんは、とにかく地元の知恵、カネでやれと。その可能性に対して疑問があったので、私の方からは、長野県の旧平村の事例などのお話をした。村民に株を買ってもらって資金をつくり、自前で電子部品の工場を立ち上げたが、必ずしも上手くいっていない。短期的にはいい。地元の金融機関の支援があれば2、3年は延命する。しかし、次第に上手くいかなくなり、潰れても話題にならなくなる。やはり、ベーシックインダストリーを探さなければいけない。ここがカギであろう。そのヒントになるのは、イギリスでサッチャーが、ロンドンへの集中を止めるべく何をやったかということ、官庁を田舎に持っていった。すぐに必要なものはロンドンに留めたが、特許庁はバックストンという人口2万人ぐらいのまちに持っていった。運転免許の管理はウェールズのスウォンジーという炭鉱のまちで、雇用効果は6,000人程あると聞いた。ベーシックインダストリーは民間だけで考える必要はない。第三セクター、外資でも構わない。

- ・今枝さんは、一宮の産業的再生は「起」からということでお話をされた。産業にとって、一宮の中心部の方は、必ずしも基盤がいいわけではない。旧尾西はもともとの産業基盤が、ものづくりをベースにつくっているから、条件が整っている。だから、起からだということである。ただ、われわれのイメージではもう一回、毛織物と思うので間違ってしまう。そこを切り離して、どう新しいところへ行くか。そこで思うのは、これまで話をしているが、「コナミ」。これを活用して、スポーツに関わるものなど、市内のポテンシャルに結びつけていけないかと思う。もうひとつが、木曾川の河川の雄大な流れの活用したスポーツ絡みの観光産業。これは待ちの姿勢ではできないだろう。もう40年も前になるが、『東海の伝統工芸』という本を書いた。豊橋の筆、有松の絞り、関の刃物など。潰れたものが多いが、資料的価値はあると思う。

(了)

■地歴学講座にご出席いただいた方々

(前期+後期+シンポジウム)

|        |       |       |
|--------|-------|-------|
| 伊藤 清武  | 桐田眞利子 | 大野 成人 |
| 星野 博   | 谷口 庄一 | 安井曾太郎 |
| 田中 敬子  | 杵山 逸子 | 杵山 さち |
| 久保 泰男  | 野村 健  | 川井 治  |
| 中島 路可  | 加藤 邦彦 | 脇田三代次 |
| 脇田 みね子 | 野々垣重男 | 佐藤 憲司 |
| 野田 貞三  | 加藤 哲夫 | 橋本 平雄 |
| 水野 一成  | 杉本 一芳 | 粕谷 孝子 |
| 町田 修   | 富田 和暁 | 谷 進   |
| 脇田 敏英  | 石丸 篤朗 | 後藤 勇  |
| 青木 俊克  | 重松 幸夫 | 高田 聖也 |
| 風間 昭宏  | 岩田 昭  | 尾関 外夫 |
| 祖父江崇悟  | 関戸 鏗二 | 安田 誠  |
| 脇田 英邦  | 倉石 義夫 | 近藤 松三 |
| 今枝 靖和  | 山本 匡毅 | 大野 利雄 |
| 服部 修寛  | 川島 照三 | 竹添 賢一 |
| 田辺 則人  | 小島 芳香 | 渡辺登志子 |
| 木村 克美  | 木村芙美子 | 吉川 昂佑 |
| 秋山 道雄  | 森川 滋  | 佐々木滋生 |
| 土井 幸平  |       | (敬称略) |

皆さま、ありがとうございました。

2014. 3. 8

「伊藤喜栄塾」運営事務局／今枝忠彦  
NPO 法人志民連いちのみや／星野博

【講師：伊藤喜栄】

1931年一宮市生まれ。名古屋大学大学院修了後、大分大学、名古屋市立大学、金沢大学、慶応義塾大学、神奈川大学等で助教授・教授を歴任。経済地理学、歴史地理学、地域政策論を専門とし、「地歴学」を提唱。『図説日本の生活圏』、『教養としての地歴学—歴史のなかの地域』など著書多数。

【コーディネーター：今枝忠彦】

1957年一宮市生まれ。1983年名古屋工業大学大学院（建築学）修了後、(株)都市計画設計研究所で、全国各地の都市計画・まちづくりの計画策定に従事。2010年、イズムワークス設立。2007年、中心市街地活性化診断・助言事業検討委員（経済産業省）として一宮市を担当。著書に『街は要る』等。

共催：NPO 法人志民連いちのみや